

# 大学運動部に関する調査・研究（第1報）

—— 本学構成員に対するアンケート調査を中心として ——

成 瀬 璋  
青 木 清 隆  
加 納 樹 里  
岡 本 純 也  
柳 井 宗一郎

## 要 約

大学運動部の現状を把握し、その位置づけと今後の発展の方向性を探るための資料収集の一環として、部活動に関する文献的調査と、本学構成員に対するアンケート調査を実施した。対象とした運動部員、一般学生、教職員の3群の回答を比較検討することを基本作業として、アンケート結果の分析を行なった。

その結果、以下のような傾向が指摘された。

- (1) 本学構成員の大多数は運動部の存在意義を認め、部の強化やスポーツ推薦入試制度についても肯定的な意向を示した。
- (2) 一般学生、教職員の多くは、運動部の活動や競技成績に一定の興味は示しているものの、部員との個人的な接触の機会が少なく、部の存在を身近なものとは感じていない。
- (3) 本学構成員の大多数は、運動部の活動と学業とは両立させるべきであると考えているが、現状ではこの点で、数多くの問題点が指摘された。
- (4) 運動部員の多くは、教職員の協力体制や指導体制の改善を望んでおり、部の強化には優秀選手の確保とともに、寮(合宿所)を含めた練習環境の整備が必要と考えている。
- (5) 一般学生からは、部活動をもっとオープンで身近な存在にして欲しいとの指摘が、教職員からは、部活動の在り方を検討し、支援体制を考慮すべきとの指摘が数多く寄せられた。

## 1. はじめに

筆者等は、本紀要12号(1994年)<sup>1)</sup>、14号(1996年)<sup>2)</sup>において、雇用形態や経済状況の変化、スポーツコマーシャルイズムに伴う競技レベルの高度・専門化等の影響を受けて、変革を余儀なくされている企業における競技スポーツの実態について報告した。

社会的環境の変化は、企業スポーツ活動のみならず、長年にわたって日本のスポーツ界の牽引役を担ってきた大学運動部にも、様々な影響を及ぼしていると考えられる。アマチュアリズムが実質的に崩壊し、大学運動部が多くの競技種目で主役の座を追われて久しいが、スポーツ推薦制度や奨学金制度を充実させ、運動部の活躍を通して大学をアピールしようとする試みを模索する大学も存在する。深刻な経済不況にあえぐ企業が、運動部をリストラの矢面にたて得ることは既に報告したが、近年ではこのような形態の弱点を克服し、プロ化や、地域との連携に活路を見いだそうとする動きも指摘されている<sup>3)</sup>。大学運動部の活動を、わが国における競技スポーツの一端を担うものにとらえるならば、企業における運動部活動が直面している問題は、等しく大学運動部にも転化し得るであろう。

1993年5月に開幕したJリーグは、サッカーのプロリーグ設立と同時に、“Jリーグ百年構想”というスローガンの下に、欧州型の地域に根ざしたスポーツクラブ設立のプロモーション活動を開始した<sup>4)</sup>。近年、中学・高等学校の運動部活動については、学校から地域への移管の方向性が示されるなど、一流競技者をめざすユース年代の青少年の選択の幅は、民間のスポーツクラブの活動等も考慮すれば、いくらかは広がりつつあるように見受けられる。しかし、一方で中学・高校を含む学校組織下での運動部活動が、以前として日本の競技スポーツの底辺を支えており、日本のスポーツ施設の大半を学校体育施設に負っているのも事実である<sup>5).6).7)</sup>。

大学で一流競技者をめざす者にとって、他ならぬ大学で競技を続ける事の意義は何なのか？大学運動部を取り巻く社会の変化に対応しつつ、大学ならではの創意・工夫をこらし、実績をあげる可能性について検討されねばならない。今までにも、大学の研究機関とタイアップし、スポーツ科学を導入した効率的なトレーニングでインカレ連勝を続けている本学水泳部の例や<sup>8)</sup>、一般学生の健康・体力増進の機会提供も目途としながらトレーニング・センターの設立を構想した例などが報告されている<sup>9)</sup>。

「競技力向上」や「勝利至上主義」といった枠組をはずして検討すれば、大学運動部のおかれている現状はさらに多様化し、大きな変革の渦中にあると考えられる。

数年来指摘されている学生の“運動部”離れはもとより、最近ではサークル活動、同好会といった規模の集団でも、その人間関係をうとましく感じる若者が増加しているとの指摘もされている。勝利至上主義とは無縁のアウトドアスポーツの流行、ルールや仲間拘束されないニュースポーツの誕生など、“運動部”に属さないスポーツ活動の可能性も広がりを見せており、部活動に対する学生達の意識にも変化が生じていると思われる<sup>10)</sup>。

さらには運動部学生の「授業への出席」、「勉学との両立」といった学生生活の根幹にかかわる点でも、本学法学部でのスポーツ推薦入学生に対する特別語学クラスの設置など、個々のレ

ベルでは様々な努力が積み重ねられてはいるものの、多大の検討課題を残しているといわざるをえない<sup>11),12)</sup>。

18歳人口の激減が見込まれる昨今、大学改革をめぐる活発な議論とあわせて、学生の心身の健全な成長をうながす場としての大学運動部の機能が見直されるべき時期に来ていると考えられる。

そこで筆者等は、現在の大学運動部が置かれている状況を把握し、その社会的意義と発展の方向性を探るための資料収集の一環として、本学構成員（運動部学生、一般学生、教職員）を対象としたアンケート調査を実施した。

本論では、大学運動部に関する調査・研究の第一報として、このアンケート結果の分析と、考察に際して参考とした運動部活動に関する先行研究、文献調査の結果をあわせて報告する。

（加納 樹里）

## 2. 先行研究の概要

序文でも述べたが、現在、大学運動部は変革の時期にあると考えられる。学生の「運動部離れ」、運動部の学生の成績問題、スポーツ系同好会による運動部の体育施設専有に対する批判など、大学における運動部のあり方の見直しの必要性が高まっている。しかしながら、これまでの運動部に関する研究、論考をみると、運動部への批判、見直しの必要性は今日の問題ではなく、これまでも再三繰り返されてきたことが分かる<sup>\*1)</sup>。それにもかかわらず、現在、同様な批判がなされるのは、運動部の実質的改革がこれまでなされてこなかったことの現れといえよう。これは、一方で、暗黙ながら共有されている、わが国のスポーツ界、教育界における運動部の伝統的位置づけが確固とした明確なものであり、他方で、批判的言説に基盤をおいた制度的な位置づけが曖昧であったことに起因すると考えられる。市場の国境が取り払われる金融自由化政策の中で、企業における日本の伝統的システムの見直し、変革が行われている現在、スポーツ界、教育界における伝統的システムの実質的な変革の時期が迫っているといえよう。ここでは、これまでの運動部に関する先行研究を概観し、大学運動部が抱える今日の問題の諸相とその原因を明確にしたい。

大学運動部だけではなく、教育界における運動部のあり方に関する批判、問題点の指摘をするこれまでの研究、論考は枚挙に暇がない。しかしながら、その主な論点は運動部組織の封建的なあり方に集中している<sup>\*2)</sup>。上下を重んじる人間関係、そのような人間関係の中で醸成される組織に従順な構成員の性質、軍隊にも譬えられる非科学的・非合理的なトレーニング、勝

利至上主義への偏向などである\*3)。

菅田は、運動部集団における封建的な「上級生一下級生」の人間関係の成立基盤を「先任の投資量の差異に」求め、存続の基盤を「日本の歴史的社会的背景による『和』の思想」に見いだしている\*4)。また、スポーツを中心にした集団内部において生じる必然的能力主義、勝利至上主義は、「上級生一下級生関係」における支配関係を脅かし、その反作用として「権力的な支配関係」が顕在化されると述べている。そして、その中の個人は「自己の集団における身分証明 (identity) と安定感を得るために自我を喪失し、集団に内在する個人」になることを指摘する\*5)。

一方、多田納は、これまでの西洋個人主義と対比された「和、タテ社会、恥の文化、甘え」などの日本の伝統を論拠としたスポーツ集団批判を画一的であるととし、その存立基盤を、「同じ釜の飯」を基盤においた日本的集団の「間人主義」に求める\*6)。多田納は濱口の日本人論に依拠しているが、そこで中心概念とされる「間人主義」が共有された集団内部では、個人は自律性を欠如させているのではなく、実は、「豊かに備わったシステムの自律性」を表出しているのだという\*7)。ただし、多田納は、「間人主義」的集団と個人のあり方を一方的に擁護するのではなく、そこにみられる長所と短所を慎重に指摘するのである。ここには、これまでの西洋個人主義を正統なるものとした、一方的に日本的スポーツ集団を「遅れた」「前近代的な」「封建的な」集団とみなす批判を相対化する視点が含まれているといえよう。

これらの運動部集団における人間関係の研究に特徴的なのは、この、外部の集団とは明らかに異なった雰囲気をもつ集団を、非常に「日本的」「集団／個人」の在り様を具現化している社会組織として捉えているという点であろう。数々の運動部批判の論調である「封建的である」「軍队的である」といったものさえ、かつての日本にみられた集団を、その比喩として扱っているのである。そして、その多くが「日本的集団」のネガティブな要素をそこに見いだしている。そのような視点は、やはり、多田納が指摘するように、西洋個人主義を正統なものとして捉え、それに対して日本的な集団を「遅れた」「前近代的」なものとしてみる、いささか偏ったものであるといえよう\*8)。問題は、そのような、外部から見て一種独特な特徴をもった社会集団が、なぜ、再生産され続けているかという点である。

残念ながら、こうした視点からの総合的な運動部に関する研究はなされていないが、わが国の運動部が成立し、その姿を発展させてきた歴史的過程を捉えていくといくつかの示唆を得ることが出来る。以下にそれをみていく。

わが国の運動部は明治初期にその萌芽をみる。その当時、スポーツ的活動は一般社会へは普及しておらず、したがって、運動部の成立と普及は、わが国におけるスポーツを担う集団の成

立と普及を意味していた。当初、大学や高等専門学校学生の自治的組織として成立した運動部は、その後旧制の中学校でも次々に設立されていく\*9)。

これらの運動部は学生や生徒の自由選択・任意の活動であり、正規の学校教育の中には位置づけられず、課外の活動として普及していった\*10)。しかしながら、対外試合や対校競技会などへは、それぞれの学校の名の下に出向くということがなされていたのである。こうした状況から、高等教育機関における運動部は、競技会の規模が拡大し、広域化するにつれて、瞬く間に全国へと浸透していくことになる\*11)。

このような動向の中、学校側も学生・生徒の任意の自治的活動とだけ運動部を位置づけることは出来ないようになり、正課の体育とその役割を分担するようになった\*12)。明治22年、東京府尋常師範学校では「体育ヲ奨励シ、兼テ戸外遊戯法ヲ実施セシムル為メ定時課業ノ外毎日特ニ運動ヲ課ス」と定めている\*13)。これは、主に校医の意見に基づいて衛生上の視点から運動部の必須を唱ったものであるが、その後、29年には心身の鍛錬の理由から運動部の必須化がなされている\*14)。このような高等教育部門の動きに倣って、下級の教育機関においても運動部の学校教育への位置づけがなされた。明治27年になされた「尋常中学校の学科及び其の程度」の改正では、体操科の教授時間数は第4、第5学年で5時間から3時間へと減じられているが、これは各学校において課外活動としての運動が普及しているため、正課の体操の授業を減じて問題はないという理由による\*15)。当時の学校教育における体育科（体操科）の目的は「身体の発育」「健康増進」に主眼をおいており、課外活動である運動部もその役割を大いに担うものとされたのである。だが、あくまでも運動部は課外の活動であり、一部の種目が正課体育の中に導入されることはあっても、正規の教育課程の中に正式に位置づけられることはなかった\*16)。

これは、学校制度自体が知育を主眼においており、運動部はその設立当初から、この教育的趣旨に反する面をもった存在としてみなされていたからである。

明治40年には文部省が全国中学校長会議に「各学校ニ行ハルル競技運動ノ利害及び其弊害ヲ防止スル方法如何」という諮問を行っている\*17)。この諮問を受けた校長会議は「一般学生の体育奨励になること」「生徒の元気を鼓舞すること」「共同の精神を養成すること」「団体に対する徳義を養成する機会になること」という利点を指摘すると同時に、以下のような点を運動競技の弊害としてあげている。

「一 各学校における競技運動の弊害

イ 競技に熱中するがため往々学業を疎外すること

ロ 沿革せる学校間に競技するに至れるを以て徒らに日子と金銭を費やすこと

- ハ 運動過激に失するより往々選手をして疾病傷害を受けしむること
- ニ 勝敗に重きを置くが為め公德を傷害し而して紛擾の基となること<sup>\*18)</sup>

以上のように学校側は運動部の教育的な意義をその中に見いだしながら、一方で、その「行き過ぎ」を害として認めているのである。こうして、学校の中に存在し、学校の構成員によって担われ、時に学校自体のアイデンティティの核ともみなされた運動部は、正規の教育課程に位置づけられることなく、しかしながら、国民の「身体の育成」という教育的役割の一部を担わされながら大正、昭和と展開していくのである。存在自体の明瞭さに対し、学校制度内における運動部の制度的な曖昧さは、100年を経た現在も継承されており、それが今日の運動部が抱える多くの問題の原因になっていると考えられるのである。

基本的に学生・生徒の個人的な趣味や興味にそくした自主的活動であるから、運動部は、その範疇としては私事に入る。しかしながら、それを担うのは学校の構成員であり、対校戦、競技会では学校という公の制度的存在の代表となる。このような私事と公事の境界にありながら、運動部は独特の組織を形成することになった。

島村栄一が1957年に62の大学運動部を対象に行った実態調査では、部内の組織人事の決定に関して、学校側、OB、現役部員の三者が関与している<sup>\*19)</sup>。主将、マネジャー、コーチ、監督の上に置かれた部長は、有効解答を寄せた29部の内、学校側が任命する大学が10部、学生の推薦により学校が任命する部が5、OB会選出が5部、OBと現役学生による選出が6部と、部内の最高責任者である部長の選出に際して、大学当局にもその決定権が与えられているものの、卒業生（OB会）の影響力が大きいことが読み取れる<sup>\*20)</sup>。部長の下に位置する監督、コーチはそれぞれ16部、15部がOB会の選出によって、4部、3部がOB会と大学が決定しており、ここでは、OB会の存在がより大きなものとなっている<sup>\*21)</sup>。主将、マネジャーは現役部員のみによって選出される部が、それぞれ14部と半数近くを示しているが、7部の主将の選出、3部のマネジャーの選出がOB会のみによって決定されている<sup>\*22)</sup>。また、選手の選考に対して、62部中、22部がOBのみによって、18部がOBと現役学生によって決定されている<sup>\*23)</sup>。

島村の調査から分かることは、戦後50年代の段階で、監督、コーチの上に学校側が選出する部長が置かれたことが示すように、運動部の管理・監督責任は、大学側に存在する一方で、実質的な意志決定を行っていたのは運動部のOBであった。すなわち、運動部は大学内にあって、卒業後もスポーツを愛好するOBが参加できる、大学外へも開かれた自律的なスポーツ愛好者集団であると同時に、大学の管理下に置かれる組織でもあった。こうした、愛好するスポーツを核として組織され、学生および卒業生をも含む自主的な活動集団でありながら、大学の制度の下に組み込まれるという運動部の構造は、教育機関がその受け皿となったわが国独自のス

スポーツ導入の歴史に決定づけられ、現在もなお継承されているのである。こうした集団内部において、前述したような、運動部に一種独特な人間関係が醸成されてきたと考えられる。鳥村の調査結果に見られる、部内の役割人事や選手の選考に対して、OBが大きな権限をもっているという点にも、目上の者が絶対的な権限をもつという運動部独自の「体質」が表れているといえる。

では、なぜ、このような運動部集団が明治のスポーツ導入以来、変わらずに再生産され続けているのであろうか。それは、これらの運動部が、わが国の一流競技者、スポーツ・エリートを多く輩出する基盤となってきたからであろう。たしかに、学校内に存在する体育教師や卒業生が指導者となり、机を並べ、学習をともにする生徒・学生が学校の施設を利用しながらスポーツに励むことは、非常に合理的である。指導者を養成して施設の管理も独自で行う組織やシステムを新たに創るのは非常に費用も労力も費やさなければならない。それよりも、既存の組織、施設を利用した方が早くことがすすむのである。また、対校競技や広域の競技会での自校選出の競技者の活躍は、学校にとってもそこに通う生徒・学生にとっても、さらにその学校を抱える地域にとっても誇らしいことであり、それらの選手の応援によって醸成される結束力や学校や地域への帰属意識は、教育的観点からいっても推奨されるべきものであったといえる。しかしながら、忘れてならないのは、教育的な機関である学校を基盤としたという点で、これらの運動部は多くの矛盾を当初から抱えていたということである。

先に示したように、明治期の教育者も、運動部が抱える教育的な目的に反する問題として「スポーツに熱中するあまり学業を疎かにする」という点、「経済的負担が多い」という点、「健康を害する可能性を持つ」という点、「勝利至上主義に固執しすぎる」という点を認識していた。だが、根本的な改革が行われず、現在も変わらずに運動部がその存在を学校の中に明確に位置づけられていないということは、そのような教育的矛盾を黙認し、「一般学生の体育奨励になること」「生徒の元気を鼓舞すること」「共同の精神を養成すること」「団体に対する徳義を養成する機会になること」をそれぞれの時代の教育者が優先させてきたということの証明であろう。それだけ、対校戦や競技会における学校をあげての熱中は、大きなものであったのであろう。それは、かつての東都六大学野球や早慶戦の盛り上がり、現在の高校野球への学校をあげての、地域をあげての熱中ぶりをみても想像はつくのである。

しかし、明確にされないまでも暗黙の内に共有されている「好成績を出せば、学校の中で優遇される」という前提は、運動部員が抱える「学業とスポーツの両立」「施設や経済的援助」「指導者を含む環境の整備」などの問題の解決策として、彼らが「勝利至上主義」を志向する根本原理となることは明らかである。こうした指向性が、すべての問題を解決するであろう「勝利」

に賭け、講義に出席せずに練習に励んだり、過度な練習によって傷害をおこしたり、理不尽な上下関係にも甘んじる学生を養成することにつながるとも考えられる。こうした観点から、運動部の問題は、その組織内で完結する問題ではなく、教育界における相矛盾した運動部への態度が、その根本をなしていることが分かる。

今日、スポーツへの志向も多様化し、スポーツ同好会・愛好会などのように、競技力向上を必ずしも目標としないスポーツ集団が大学内には数多く存在する<sup>\*24)</sup>。彼らの中には、同じスポーツ愛好集団なのに、なぜ、運動部には大学の施設の占有権があるのかを不信に思う者も存在するであろう。また、同じ学生なのに講義にろくに出席しないで単位をとって卒業する運動部員がいるのか訝しがる者も存在するであろう。それらの意見に対して、それぞれの大学関係者は説得力をもった答えができるのであろうか。「伝統である」「歴史的にそうなっている」では、説得力をもたない。だからといって、運動部自体を否定するというのは早急すぎる。問題は、運動部の大学における位置づけを明確にしなければならないということである。「大学の特徴として競技力向上に力を入れている。だから、運動部は他の愛好会とは別に扱う」という方針であるならば、その方針にしたがって制度を整備すればよい。また、「大学内において学生主体のクラブ活動は自主的活動であるから、どの集団も平等に扱う」という方針ならば、それまでの運動部の歴史がいかに長かろうが、他のスポーツ同好会との区別は許容されないであろう。私事なのか公事なのか、趣味なのか公務なのか、この点を明確にしなければ、大学における運動部をめぐる問題を根本から解決することにはならないであろう。

本研究は中央大学の学生と教職員を対象としたケース・スタディーではあるが、今後、今回示された定量的データに、運動部員や一般学生、教職員からのインタビューなどの定性的データを加えて詳細に問題を分析することにより、本学における運動部のあり方だけでなく、大学一般における運動部のあり方を模索するひとつのパイロット・スタディーとなると確信する。

#### 脚 註

\*1) たとえば、中村敏雄は、明治時代に文部省が行った全国中学校長会議への「各学校ニ行ハルル競技運動ノ利害及ビ其弊害ヲ防止スル方法如何」という諮問を例示し、「部活をめぐる問題のなかには100年を経過してもなお変わらないものがあり、それが私のいらだちの源泉」になっていると嘆いている。中村によるこの指摘は、近年の著書によるものであるが、氏はそれよりも18年前の著書でも全く同じ「中学校長会議への諮問」とその報告書を例にとり、運動部をめぐる古くて新しい問題点を指摘しているのである<sup>13)14)</sup>。

「運動部を変えなければならない」という問題意識は、唯一中村氏だけの主張ではなく、体育関係者の雑誌である『体育科教育』では、幾度となく「今後の運動部のあり方」という文章を締めくくりの言葉とした論考が掲載されている。運動部の変革を求める視点は、体育関係者の主流を占めると考えられる<sup>15)16)17)</sup>。



- \*2) たとえば、中村は以下のように、この組織の問題点を指摘する。
- (1) 練習量が多く、その結果、疲労が蓄積し、怪我人が増え、また学習時間も短くなる。
  - (2) 練習はかなり非科学的・非合理的で、経験主義・鍛錬主義に陥っており、無駄が多い。
  - (3) 正選手と補欠選手の分離が生じ、ヒエラルキー的な支配・服従関係が生まれ、クラブ内が民主的でなくなる。
  - (4) 勝利追求的な雰囲気強く、排他的・閉鎖的な体質が強化され、入・退部の自由が保障されない。  
中村前掲1977年書<sup>14)</sup>、146頁
- \*3) たとえば多田納は、日本人のスポーツに関するこれまでの議論について、菅原の①求道主義②勝利主義③精神主義、岸野の①勝敗主義②自虐主義③修養主義④娯楽性の排除⑤排他主義⑥自己喪失、上杉の①精神主義②自虐主義③修養主義④全力主義などを具体例としてあげ、「非常に類似した特性が指摘されているように、他の多くの議論もこれらの内容と大同小異であり、日本のスポーツの特性に関しては、研究者の間に共通の通念や常識があると言っても決して過言ではない」と論じている<sup>18)</sup>。
- \*4) 菅田圭次、「勝利追求が運動部集団に及ぼす影響についての一考察」<sup>19)</sup>、東京工芸大学女子短期大学部『飯山論叢』、第2巻／第1号、1985年、pp.151-164
- \*5) 同上<sup>19)</sup>
- \*6) 多田納前掲<sup>18)</sup>、53～58頁
- \*7) 「間人」とは、人間モデルの2類型の一つであり、「個人」モデルと対比される。主体としての人間が自己を対象化（客体視）するときに、自己のみに焦点を合わせるのが「個人」であり、自己と他者の関連までも視野に入れるのが「間人」である。自己の存立基盤を自己自身の内部に持たず、対人的脈絡をも自らの内に内包するような主体が「間人」である<sup>18)</sup>。
- \*8) 同上<sup>18)</sup>、45～46頁
- \*9) 井上一男、『学校体育制度史』<sup>20)</sup>、大修館書店、1970年、245～249頁
- \*10) 同上<sup>20)</sup>
- \*11) 同上<sup>20)</sup>
- \*12) 同上<sup>20)</sup>
- \*13) 同上<sup>20)</sup>
- \*14) 同上<sup>20)</sup>
- \*15) 同上<sup>20)</sup>
- \*16) 同上<sup>20)</sup>
- \*17) 中村前掲1995年書<sup>18)</sup>、124～126頁
- \*18) 同上<sup>18)</sup>
- \*19) 島村栄一、「日本の大学に於ける運動部の実態調査」<sup>21)</sup>、『立教大学研究報告』、第3号、1957年、pp.23-36
- \*20) 同上<sup>21)</sup>、27頁
- \*21) 同上<sup>21)</sup>
- \*22) 同上<sup>21)</sup>
- \*23) 同上<sup>21)</sup>
- \*24) 日本の大学における「同好会」、「愛好会」は「勝利至上主義」を必ずしも志向しないスポーツ愛好家の受け皿となっているといえる。これらのスポーツ愛好集団は、勝利という統一された集団の目標の拘束力が弱く、純粋に個人の目標・目的でそれぞれの構成員が参加できるという点で私的活動として一貫した安定性を保持していると考えられる。逆に、体育会運動部は、勝利という集団の目標の拘束力が強いいため、それが個人の目標との間に齟齬を起こしたとき、非常に不安定な存在となる。スポーツを純粋に私欲に基づいた活動ととらえるならば、同好会集団の方が健全なスポーツ集団であるといえるであろう。

### 3. 方 法

本学の運動部学生、運動部に所属しない一般学生（以下単に一般学生と記す）及び教職員に対し、大学運動部に関するアンケート調査を行なった。

調査用紙は対象群別に作成し（資料参照）、口頭、もしくはフェイスシートを通じてアンケート主旨を説明、了解を得た上で、97年6月～7月にかけて以下の要領で実施した。

運動部員については、学友会事務局の承諾を得て、マネージャー会議の席上で趣旨を説明し、各部のメールアドレスに用紙を配布した。調査終了後、部毎にまとめて同事務局に設置した回収箱に回収を依頼した。一般学生については、各学部の担当職員の協力を得、原則として授業前後に実施、回収した。職員については人事部長の承諾を得た上で、各部署のメールアドレスに用紙を配布し、調査終了後、保健体育研究所宛に学内便にて回収を依頼した。教員については、各学部毎に教員メールアドレスに用紙を配布し、記入後、共同執筆者を中心とした各学部担当者宛に回収を依頼した。

各対象群別の回収結果と内訳は次の通りである（表1）。

表1 各対象群別の回収結果内訳

#### 運動部員の内訳

性 別	学 年	入 学 区 分	部内での役割
男 692	1 年 221	スポーツ推薦 544	主 将 26
女 96	2 年 195	一般入試 142	副 将 36
	3 年 207	学校長推薦 34	主 務 20
	4 年 162	付 属 高 校 56	副 主 務 20
		自 己 推 薦 4	ト レ ー ナ ー 5
			レギュラー 243
			そ の 他 411
合 計 788	785	780	761

#### 一般学生の内訳

所 属 学 部	学 年	性 別	運 動 部 経 験
法 103	1 年 189	男 263	有 り 343
経 済 80	2 年 93	女 169	無 し 88
商 93	3 年 97		
文 118	4 年 46		
理 工 16			
総 合 政 策 21			
合 計 431	425	432	431

## 教職員の内訳

職 種	性 別		
教 員	77	男	147
職 員	105	女	32
合 計	182		179

注) 各欄の合計数は、アンケートのフェイスシートに正確に記入があったものみの合計数(名)

表2 体育連盟運動部と推薦枠

調査回収・運動部一覧		スポーツ推薦配分数*			
部 名	集 計 数	推 薦 枠	昼 間 部	夜 間 部	総 合 計
スケート部 (アイスホッケー)	31	*	4	3	7
硬式テニス部	17	*	4		4
陸上競技部	66	*	16		16
漕艇部	17	*	3	1	4
スキー部	15	*	5	2	7
フェンシング部	12	*	4	1	5
バトミントン部	17	*	4	1	5
射撃部	13	*	2		2
準硬式野球部	33	*	4	4	8
拳法部	19	*	1	1	2
柔道部	11	*	6		6
弓道部	16	*	1		1
A号軟式野球部	9				0
チアリーディング部	20				0
卓球部	12	*	4		4
女子卓球部	20	*	4		4
バレーボール部	17	*	6	1	7
バスケットボール部	27	*	6		6
水泳部	32	*	9	1	10
ホッケー部	22				0
サッカー部	34	*	9	2	11
レスリング部	24	*	5	2	7
重量挙げ部	23	*	3	3	6
硬式野球部	48	*	9	4	13
航空部	12				0
洋弓部	22				0
剣道部	35	*	5	2	7
自動車部	14				0
ヨット部	16	*	1	1	2
女子陸上部	33	*	8		8
馬術部	3	*	3		3
ハンドボール部	5	*	4	2	6
ラグビー部	29	*	8	6	14
アメフト部	65	*	1		1
集計数・合計 (34部)	789	(28部)	139	37	176

その他の運動部一覧		スポーツ推薦配分数*			
部名	集計数	推薦枠	昼間部	夜間部	総合計
相撲部	0	*	5		5
ソフトテニス部	0	*	4	1	5
ボクシング部	0	*	6	1	7
自転車競技部	0	*	3	1	4
ゴルフ部	0	*	1		1
山岳部	0				0
ワンダーフォーゲル部	0				0
応援部	0				0
合気道部	0				0
ソフトボール部	0				0
ソフトボール部(女子)	0				0
少林寺拳法部	0				0
空手部	0				0

\*推薦枠のある部(合計33部)

集計数=本アンケートの回収数

配分数=98年度単年度分(重点配分, 調整枠分を含む)

運動部員では、アンケート配布総数1,473、回答数789、回収率54%、男女比は88:12であった。アンケート実施時点での体育連盟運動部所属47部中、回答があった部は33部、内、いわゆるスポーツ推薦の枠を持つ部が28部である(表2)。

一般学生では、回答数が5学部総計432(男263, 女169)、平均年齢20歳、1~4年生の比率は各々44%、22%、22%、11%であった。回収率はその場で実施、回収したため、100%である。

教職員では、回答総数182(教員77, 職員105)、平均の在職年数17年、年齢46歳、回収率は全体平均で17%(教員14%, 職員21%)であった。

以上の結果より、今回は教職員を一群として扱い、回収済みアンケート中、明らかに回答が不備なものを除外した単純集計結果を資料として使用した。また、アンケート中の自由記述については別立てで考察を行なうものとし、4章-2節では特に否定的な立場からの意見を集約して運動部活動の問題点を明らかにすること、4章-3節では、理想とする運動部像、部活動の将来展望等、総括的な提案に類する見解の傾向分析を行なうことを、各々主眼とした。

なお、本論の執筆にあたっては、分担執筆による共同研究の形式を採用し、執筆担当者は各章末尾に括弧で記した。その他の作業については、アンケートの作成-配布-回収(成瀬, 青木, 加納, 柳井)、運動部員の自由記述欄分析(成瀬, 加納, 柳井, 岡本)教職員及び一般学生の自由記述欄分析(成瀬)、否定的自由記述欄分析(青木)、データの処理及び図表等の作成(加納)で分担した。なお、数値データの入力には外注とした。

(成瀬 璋・加納樹里)

## 4. 結果と考察

### 4-1 選択式回答集計結果の総合分析

本研究は現在の大学運動部が置かれている状況を把握し、その社会的意義と今後の発展の方向性を探るべく行われたものである。考察の方法としては、アンケートの単純集計結果を1. 運動部の存在について、2. 運動部の活動及び運動部との関わりについて、3. 学業と運動部活動の関わりについて、4. 運動部活動の環境及び強化についての4項目に分類し、各々の項目に対する、運動部学生、一般学生、教職員の回答を数的に把握し、その概要について考察を行った（表3）。なお、記述式の見解については4章2節以下で別途考察を試みた。

表3 アンケートの構成と該当する設問

アンケート構成	運動部員	一般学生	教職員
1. 運動部の存在・必要性	Q01-Q03	Q01-Q03	Q01-Q03
2. 運動部との関わり 選手活動について	Q04-Q10	Q04-Q10	Q04-Q10
3. 運動部活動と学業の関わり	Q11-Q19	Q11-Q15	Q11-Q15
4. 運動部活動の環境・強化	Q20-Q26	Q16-Q22	Q16-Q26

#### 4-1-1 運動部の存在について

運動部の存在、必要性については、運動部学生、一般学生、教職員それぞれQ1から3までが該当する。

Q1「運動部は大学にとって必要な存在であると思いますか」について必要であると回答したものは、運動部学生、一般学生、教職員それぞれ96.2%、90.28%、92.3%と非常に高かった（図1）。また、その存在の必要性を認知する最も重要な理由については、どの大学構成員（運動部学生、一般学生、教職員）も運動部が「大学の知名度を高めるのに役立っている」と回答している。大学の運動部とは、本来勝つことを目的とするプロフェッショナルスポーツとは異なり、学生の心身の健全な育成を保証する場として存在すべきものであると考えられる。本学は1998年4月から10月の期間において国内大会で陸上競技部、水泳部、相撲部、準硬式野球部、馬術部、柔道部、女子陸上競技部、漕艇部、自転車競技部、重量挙げ部、射撃部、拳法部、ソフトテニス部、ハンドボール部が全国大会またはそれに準ずる大会において優勝をしており、

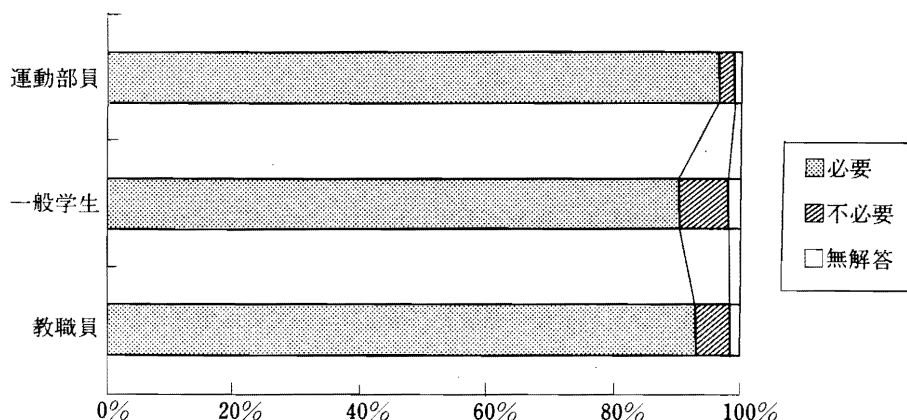


図1 運動部の存在

スポーツで知名度の高い大学という独自のイメージを本学構成員が持っていることを裏づけるものではないかと考えられる(参考資料3)。この結果はさらに、自分の大学の知名度が高いことが大学への満足感、さらには自分自身の存在感までも高めることにつながっていると考えられる。

次に重要な理由については、運動部学生、一般学生では「日本のスポーツ界の発展に貢献している」と回答したのに対し、教職員では「卒業生の連帯感の醸成に役立っている」と回答している。この結果に関しても、大学から刊行される新聞や一般報道機関等からの情報により、スポーツで知名度の高い大学というイメージを本学構成員が持っている裏づけになると考えられる。学生と教職員での回答が異なったが、この相違について教職員では、大学在学中よりもむしろ卒業した後に、母校の話題のきっかけとして、あるいは母校の話題が持ち上がったときに、運動部の話題が数多く話されると考えているため、その存在の必要性を認知していると考えられる。

かつて、筆者らは中央大学保健体育研究所紀要第12号、14号で「企業における競技スポーツについて」<sup>1)2)</sup>を発表したが、そのなかで企業スポーツは「企業宣伝の手段」(Aタイプ)として、あるいは「社員の連帯感や士気の高揚」(Bタイプ)のために存在すると考えた。今回、「大学構成員の連帯感の醸成に役立っている」、「大学構成員の士気高揚に役立っている」といったBタイプに関する質問をしたところ、合計の割合が運動部学生、一般学生ではそれぞれ42.6%、53.3%で、教職員では73.2%という結果であった。この結果は、大学の運動部活動も企業スポーツと同様、連帯感や士気の高揚に役立つ可能性を示したものであり、また、教職員のほうが学

生よりもこのことを強く感じていると考えられた。

これらの結果より運動部の存在については、大学の構成員の大多数がその必要性を認知していた。その理由としては、大学の知名度が高められる点がまず挙げられ、そのほか卒業後に運動部の話題で連帯感を高められる点が考えられた。

#### 4-1-2 運動部の活動及び運動部との関わりについて

運動部の活動及び運動部との関わりについては、運動部学生、一般学生、教職員それぞれQ4から10までが該当する。

##### 運動部学生の選手活動について

Q4「あなたは何のために選手活動をしているのでしょうか」については、「自分の生き甲斐のため」と回答したものが最も多く、ついで「自分の名誉のため」であった。この結果については運動部に所属する選手達の多くは、自分を表現する一つ的手段として、あるいはアイデンティティーを求めて活動していることが明らかとなった。その次に多かった回答は「自分の健康、体力づくりのため」であった。これに関しては本学の運動部は主にスポーツ推薦入学者で構成されるクラブと、それ以外の学生で構成されるクラブに分類することができるが、スポーツ推薦で入学してきた学生は、高校時代トップアスリートであったものが少なくないという現状から、健康、体力づくりでスポーツを行っているとは考えにくい。そこで、この回答の多くはスポーツ推薦入学以外で入学した運動部学生と考えられる。

Q5「あなたの入学、入部動機は何ですか」については「スポーツ、学術ともに伝統があり、社会的に評価の高い大学である」と回答したものが他と比較して極めて多かった。この結果より、運動部学生は、入学時に自分の大学に関してはある程度の満足感を抱いていると考えられる。

Q6, 7「あなたが選手活動を行うための現在の環境で充分評価できる点、改善すべき点は何ですか」については、評価できる点は「練習時間が充分確保できる」「練習施設は常に使用できる」と回答したものが多く、改善すべき点は「教職員の協力体制」「指導体制」「専任トレーナーの確保」と回答したものが多かった。これらの結果より、練習施設や練習時間といったハード面では評価できるが、教職員の協力体制、運動部の指導体制といったソフト面で不満をもっているものと考えられた。改善すべき点として教職員の協力体制と回答した者が多数見られたが、これは教職員が一般学生と比較して、特に運動部学生に対して非協力的という意味には解せない。というのは、Q27で理想とする運動部像について自由記述させたが、「運動部学生の特別クラスを設置して欲しい」「試合時の欠席は認めて欲しい」「単位習得を容易にして欲しい」「卒業させて欲しい」といった記述が多く見られたためである。つまり、運動部学生は練習、

試合で日常生活を束縛されている自分達と一般学生を区別して、学業に対して運動部学生の扱いを有利に考慮して欲しいと考えているため、現在の教職員の協力体制では不満であると考えているのではと思われる。

選手活動については、自分の名誉、生きがいといった自分を表現する一つの手段として行っているものが最も多かった。練習環境については、施設、練習時間といったハード面では評価できるとしており、指導面で不満が見られた。

一般学生、教職員と運動部の関わりについて

Q4「あなたは普段運動部の活動や競技成績を気にしていますか」については、一般学生55.8%、教職員81.9%で共に半数以上が気にしていると回答したが、教職員のほうが気にしている割合は高かった(図2)。気にしていると回答した人は、直接試合や練習を見に行かないまでも、新聞(大学スポーツ新聞を含む)やテレビを通じて試合を見たり、結果を知る傾向が強いという結果が得られた。また、気にしていないと回答した人は、一般学生、教職員共に興味がない、あるいはスポーツ自体に興味がないという回答が圧倒的に多く、また、一般学生に関しては運動部に知り合いがなく身近に感じるができないため、興味がないといった回答も見られた。

Q8では運動部学生との個人的な付き合いの有無について尋ねているが、付き合いがあると回答したのは一般学生で60.6%、教職員で39.0%と一般学生のほうが高い結果を示した(図3)。しかし、付き合いの程度に関しては、一般学生では「立ち話」「食事に行く」といった回答が多く、プライベートな問題や学業についてはあまり話し合っていないという結果であった。それに対し、教職員では個人的な付き合いは一般学生に比べて少ないが、学業や進路に関する相

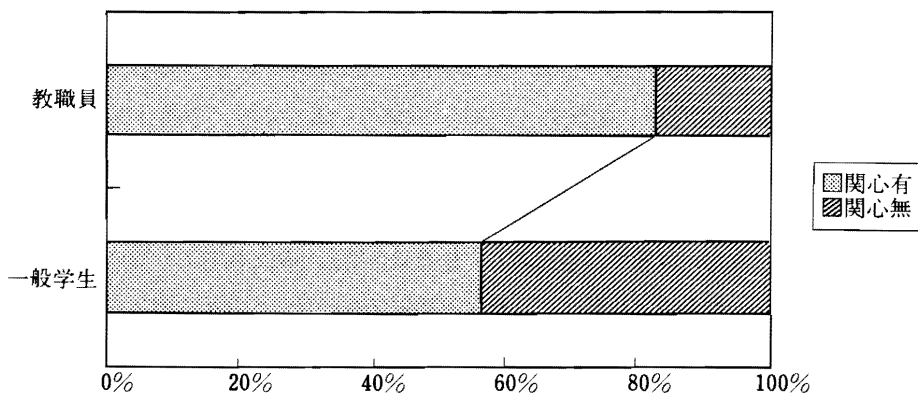


図2 部活動・競技結果への関心



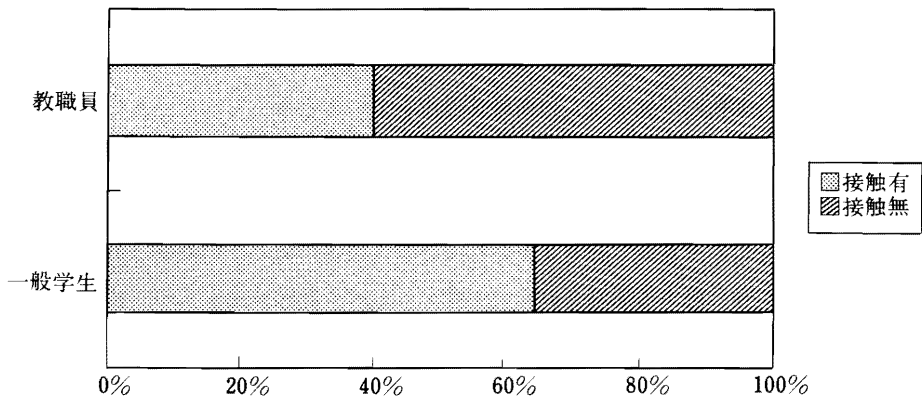


図3 運動部員との個人的接触

談が多いという傾向が見られた。

これらの結果より、一般的には一般学生、教職員共に運動部の活動や競技成績には興味をもっていると考えられるが、個人的な付き合いとなると一般学生同士、教職員同士の付き合いとは異なり、一般学生、教職員にとっては運動部学生を身近な存在とは考えていない傾向が強いと考えられる。これは寮生活や練習中心の日常生活を過ごす運動部学生が多数存在するため、人間関係も勢いクラブ内の友達が主となるためと考えられる。今後、一般学生、教職員と運動部学生のコミュニケーションが現在よりもより活発になれば、運動部学生の存在が一般学生、教職員にとって身近な存在となり、運動部の活動や競技成績にもより多大な興味を示すと考えられる。

#### 4-1-3 運動部活動と学業の関わりについて

運動部の活動と学業の関わりについては、運動部学生Q11～19、一般学生、教職員それぞれQ11～15までが該当する。

運動部活動と学業の関わりについて（運動部学生）

Q11「学業と部活動は両立させるべきだと思いますか」については、85.7%の学生が「はい」と回答しており、多くの運動部学生が学業の重要性を認識していることが明かとなった(図4)。「いいえ」と回答したのも12.5%いたが、その理由としては「授業についていけない」といったものが多く、わからないから、あるいは無理だから両立すべきとは思わないといった考え方をしているものがほとんどであった。

両立させるべきと考えている学生が具体的にどのようなことをしているのかというと、クラスの友人と情報交換をしたり、履修科目選択の段階で部の上級生から指導を受けるといった周

囲の友人、上級生などからの情報を活用している学生が最も多かった。これに関してはQ16「学業のためにクラスの友人達は協力、支援してくれますか」で85.9%が「はい」と回答していることから、多くの運動部学生は友人の情報を活用していると考えられる。次いで、試合等で欠席する以外は授業に出席すると回答したものが多く、運動部学生は学業との両立には、科目履修段階での情報、授業への出席、友人からの授業情報が重要と考えていると思われる。

しかし、学業の際に最も重要であると思われる予習、復習に関する回答は芳しくなく、これは運動部学生の学業に対する姿勢そのものが問われるべき問題ではあるが、彼らの生活環境にも原因があるのではないかと考える。つまり、多くの学生が寮や合宿所で共同生活しており、個室ではなく一部屋四人前後で生活しているため、その雰囲気なかで一人で予習復習することは、困難と言わざるを得ない状況も多数出てくると考えられる。このことから寮や合宿所における勉強部屋の設置などは学生に勉強を促す一つのきっかけになると考えられる。さらに、部長、監督、コーチ等が部活動でよい結果を残せばそれでよいという指導ではなく、かつて本学某運動部が講師を招いて勉強会を催して、寮のなかで勉強する雰囲気を作り出そうとしたように、学業に関しても指導者が配慮してやり単位習得状況の悪いものは公式試合に出さないなどの制限を設けて、入部してきたものは全員卒業させるような指導も重要と考えられる。

#### 運動部活動と学業との関係（一般学生、教職員）

図4に示したように一般学生、教職員ともに運動部学生の結果と同様、多く（74.3%、85.5%）が運動部の活動と学業は両立させるべきであると考えていた（Q11）。しかし、運動部の活動と学業は両立させるべきと考えている一般学生、教職員の多くは、現状では図5に示したように運動部活動と学業の両立はできていないと考えており（Q13）、その理由としては、練習や

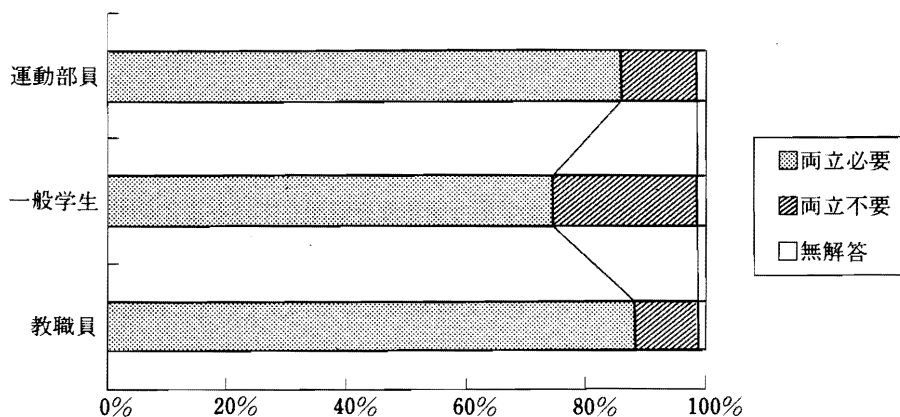


図4 部活動と学業の両立（必要性）

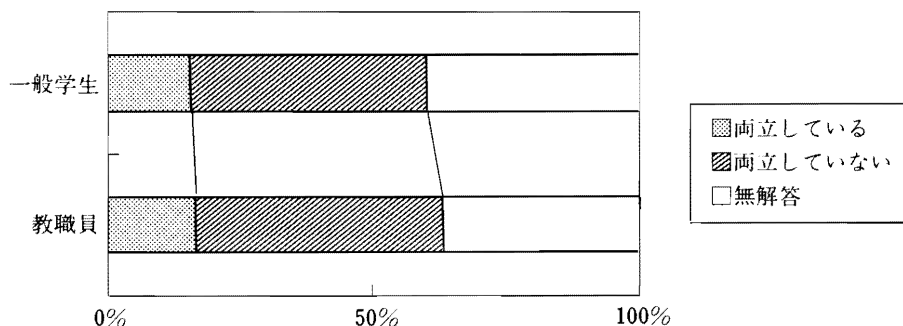


図5 部活動と学業の両立（現状）

試合などで授業に参加できないと回答したものが一般学生、教職員共に最も多かった。しかし、この質問に関しては無回答が非常に多く（一般学生39.8%、教職員36.8%）、これは前述したように、一般学生、教職員は運動部学生を身近な存在とは考えていない傾向が強いため、コミュニケーションの不足から実際の彼らの日常生活を知らないためこのような結果となったと考えられる。

運動部活動と学業の関わりについては、運動部学生、一般学生、教職員共に両立すべきであると考えており、そのために運動部学生は履修段階での情報、授業への出席、友人からの授業情報が重要と考えていた。しかし、授業の予習、復習は多くの運動部学生がしておらず、運動部指導者の学業面での配慮が重要であると思われた。

#### 4-1-4 運動部活動の環境及び強化について

運動部活動の環境及び強化の関わりについては、運動部学生Q20～26、一般学生Q16～22、教職員Q16～26までが該当する。

現在本学では、毎年一部、二部合計で約200名のスポーツ推薦入学を認めているが、この制度については運動部学生では92.4%、一般学生では77.3%、教職員では86.8%が必要であると回答し、多くがスポーツ推薦制度の必要性を感じていることが明らかとなった（図6）。前述したように、本学の運動部は大学の知名度を高めるのに役立っていると多くの大学構成員が考えており、大学の知名度を高めるためには現在の運動部のレベルを維持、あるいは向上させることが必要であり、そのためにはスポーツ推薦入学の継続が望まれると考えているものと思われる。

また、この制度について改善して欲しい点は、運動部学生では「全体の推薦枠を増加させる」が最も多く、次いで「各運動部の競技成績や学業成績に応じて推薦枠を見直す」であった。こ

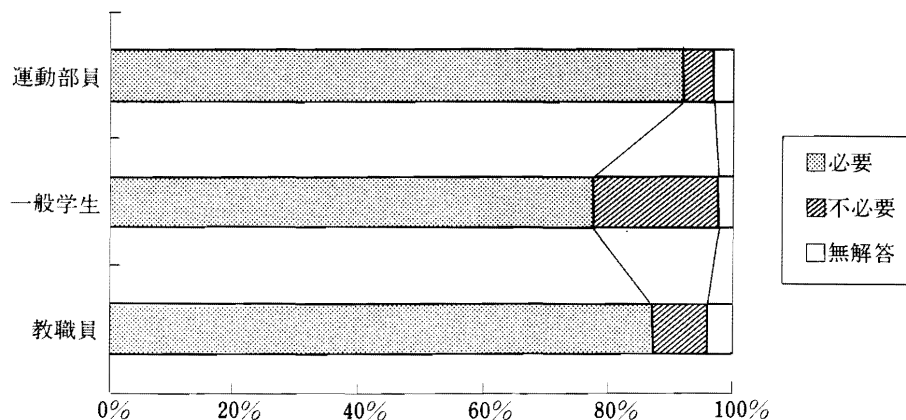


図6 スポーツ推薦入学制度の必要性

の結果より、運動部学生はスポーツ推薦入学により、現在より多くの入部者を希望していると考えられた。また、運動部学生の大多数はスポーツ推薦制度については必要性を感じているが、その推薦枠にはばらつきが見られ、総数47運動部のなかで推薦枠のある部は33で、推薦配分人数においても1名から16名と大きな隔たりがあり、不平等を感じている運動部が潜在的にかなり多く見られることを意味しているのではないかと考える。これに対し、教職員では推薦枠を増加させるといった意見よりも、推薦枠を見直すといった回答が最も多く、各運動部の競技成績や学業成績に応じて、あるいは競技種目に応じて推薦枠を見直すべきと考えており、運動部学生同様、各クラブの推薦枠に関して検討の余地があると考えているものと思われる。

本学では現在奨学金制度はないが、これに関しては運動部学生では83.3%、一般学生では70.6%、教職員では75.3%がその必要性を認めている。奨学金の方法としては、運動部学生、教職員ともに競技成績、学業成績、経済状況から判断して行うべきといった意見が最も多かった。しかしこれらの結果は、運動部学生においては奨学金制度によってよりスポーツの才能がある学生を入学させて、運動部をより強くしたいといった思惑があり、一般学生、教職員は奨学金制度によって運動部がさらに強くなり、大学の知名度が高まることを期待しているものと考えられ、その目的は運動部が強化されることである。つまり、奨学金制度を導入しなければ運動部を強化できないと考えて回答したのではなく、運動部強化のための一つの方法として必要と回答したと考えるのが妥当であると思われる。

また、スポーツ奨学金制度に関しては、入学金免除、学費免除など様々な方法がいくつかの大学によって行われているが、同一クラブでの学生間のランクづけによる人間関係の不和、奨

学金を受け取っている学生が怪我などによる競技中断の際の処置といった問題も浮き彫りにされている。さらに、少子化により「大学冬の時代」と言われる現代、財源の確保も困難になると考えられ、導入に際して様々な問題が山積しているのが現状ではないかと考える。

部の強化に関しては、一般学生、教職員でそれぞれ62.3%、75.3%が強化すべきと回答した。強化のために最も必要と考えられるものは運動部学生、教職員共に「優秀な選手の確保」であった。これについては、多くの運動部学生、教職員が優秀な指導者、良好な練習環境よりも優秀な選手を確保できれば部の強化につながると考えており、先のスポーツ推薦入学制度やスポーツ奨学金制度の必要性に関して、多くが「はい」と回答していることから裏づけられると考えられる。

その他、「寮や合宿所の整備、拡充」「専任指導者の確保」「専任トレーナーの確保」を望む回答が比較的多く見られた。「寮や合宿所の整備、拡充」は特に運動部学生からの回答が多く、現在約600名の運動部学生が生活する本学南平寮に関しては、トレーニング施設の老朽化、食事に関しての不満等が考えられ、運動部学生の寮としてより快適な環境へ改善するよう大学側の配慮が望まれると考えられた。

「専任指導者の確保」に関しては、運動部学生、教職員双方から比較的多く回答があった。この結果は、多くの運動部において専任の指導者が存在しないため、平日は学生自身で練習を行い、休日に指導者が練習、若しくは試合を見るという実態が浮き彫りになったと考えられる。このことから、専任指導者を確保できれば平日にも指導して、練習内容の改善を期待でき、その結果競技成績の向上に結びつけることができるのではないかと考えられる。

「専任トレーナーの確保」に関しては、わが国全体のスポーツ界においても米国と比較してスポーツ障害に対する理解が不足しており、大学スポーツ界で専任トレーナーを設置している大学は未だ少数であるのが現状である。しかし、医学部、体育系学部をもつ大学では、学生トレーナーが選手のコンディショニングを管理する体制が整っているところも存在する<sup>22)23)</sup>。本学では運動部学生のために無料で針治療を受けられるサービスを1996年7月より開始した。これは長期休暇以外の月曜日から土曜日まで午前10時から午後6時まで開設している。専任トレーナーを早急に設置するのは困難と考えられるが、このサービスがきっかけとなり、運動部学生のスポーツ障害に対する認識が高まり、彼らのコンディショニングを統括する組織を設置して欲しいという雰囲気が高まれば、近い将来何等かの形で専任トレーナーの設置が実現する可能性はあると考えられる。

#### 4-1-5 本節のまとめ

選択式回答の集計、数値データから以下のことが考えられた。

#### ①運動部の存在について

運動部の存在については、大学の構成員の大多数がその必要性を認知していた。その理由としては、大学の知名度が高められる点がまず挙げられ、そのほか卒業後に運動部の話題で連帯感を高められる点が考えられたが、いずれも多くは運動部の競技水準が全国レベルにある本学独特の結果と考えられた。

#### ②運動部の活動及び運動部との関わりについて

運動部学生は自分の選手活動について、「自分の生き甲斐のため」「自分の名誉のため」に行っているものが多く、自分を表現する手段として、あるいはアイデンティティーを求めて行っていると考えられた。

一般学生、教職員と運動部の関わりについては、両者共に運動部の活動や競技成績には興味をもっていると考えられるが、個人的な付き合いとなると一般学生同士、教職員同士の付き合いとは異なり、一般学生、教職員にとっては運動部学生を身近な存在とは考えていない傾向が強いと考えられる。これは寮生活や練習中心の日常生活を過ごす運動部学生が多数存在するため、人間関係も運動部の友達が主となるためと考えられるが、今後、一般学生、教職員と運動部学生のコミュニケーションが現在より活発になれば、運動部学生の存在が一般学生、教職員にとって身近な存在となり、運動部の活動や競技成績にもより多大な興味を示すと考えられた。

#### ③運動部活動と学業の関わりについて

運動部学生、一般学生、教職員共に運動部活動と学業を両立すべきであると考えており、運動部学生はそのために履修段階での情報、授業への出席、友人からの授業情報が重要と考えていた。しかし、授業の予習、復習は多くの運動部学生がしておらず、各運動部の指導者の学業面での配慮が重要であると考えられた。

#### ④運動部活動の環境及び強化について

運動部の強化に関しては肯定的な意見が多く、優秀な選手の確保や受け入れ体制の整備の必要性などが指摘された。部活動を取り巻く環境では、寮や合宿所の整備、拡充、専任トレーナーの配置が重要課題と考えられた。

(柳井宗一郎)

#### 4-2 自由記述にみられた運動部の問題点について

本節は、回収されたアンケートの中から運動部の存在や活動などに対して示された否定的な見解（記述式による否定的見解）を抽出・分析し、前節で展開された選択式回答集計結果の総合分析を踏まえながら、運動部の抱える問題点を明らかにしようとするものである。後述のとおり、それぞれの設問に対して否定的な立場を示した人は、数の上では決して多くはないが

表4 否定的回答者の比率（％）

設 問・内 容	教 職 員*	一 般 学 生
運動部は不必要	6 (Q 3)	8 (Q 3)
運動部の活動には無関心	17 (Q 6)	43 (Q 6)
運動部活動と学業の両立不必要	10 (Q15)	24 (Q15)
スポーツ推薦制度は不必要	9 (Q20)	20 (Q19)
スポーツ奨学金制度は不必要	20 (Q23)	27 (Q19)
運動部の強化は不必要	17 (Q26)	33 (Q22)

( ) は該当する設問

\* 今回の処理では、教職員を一括して扱った。

ただし、回答のあった教員に比し職員の否定的見解は極めて少ない。

(表4)、否定的な意見は、大学における運動部の抱えている問題点を理解し、その改善策を検討していく上でも重要な意味を持つものであると考えられる。ここに本節の意義が存在する。ただし、それらの意見の中には、無関心という立場からの極めて無責任な記述も含まれているので、取り扱いには十分な配慮が必要であろうし、また限られた少ないスペースでの記述である以上、それを読み解く作業にあっては慎重を期さねばならないであろう。

分析にあたっては、1. 運動部の存在(必要性)について、2. 運動部に対する関心について、3. スポーツ推薦入学制度について、4. 運動部の強化についてという、本意識調査の重要なファクターである4つの項目に対する否定的見解を、明らかに視点の異なる教職員、一般学生、運動部学生それぞれに検討を加えることを基本作業とし、可能な限り総括的な分析も試みた。

#### 4-2-1 運動部の存在(必要性)に対する否定的見解

「運動部は大学にとって必要な存在であると思いますか」という設問に対して、教職員、一般学生、運動部員のそれぞれ90%以上が必要であるとの見解を示している。それとは逆に必要ではないと回答した人は、教職員10名(5.5%)、一般学生33名(7.6%)、運動部員20名(2.5%)であった。運動部が必要とする人達の多くが、運動部とは大学生の健全な心身の育成を保障する場であり、大学の知名度を高めることや大学構成員(教職員・学生)の連帯感の醸成に役立つということを存在の意義と考えているのに対して、存在そのものに否定的立場をとる人達の運動部不要論とは、概ね次のようなものである。

教職員が示した運動部を不要とする理由を分析すると、大きく3つの視点に分けることができる。1つは、運動部の存在そのものが本来の大学教育の趣旨からはずれるといえるものである。この中には体育学部のような専門学部での存在なら理解できるという意見や、現在運動部が果たしている役割は、本来、地域クラブ・スポーツが担うべきであるとするものが含まれている。

2つめは、時代の変化に伴う存在価値の変容を指摘するものである。つまり運動部の存在価値は従前よりも低くなり、今や運動部の必要な時代ではないという意見である。以上の2つの視点は、先に記した運動部が必要であるとする人達の考える存在意義とは、対極的な立場をとるものである。3つめの視点は、本学運動部の現状批判からの否定見解である。ここには幾つかの意見が展開されているが、スポーツ推薦入学制度に関わるものが特に目につく。集約すると、一般学生と学力の差がある学生をあたかも大学の売名宣伝のために無理に集め、しかも入学後、勉学を保証せずにスポーツを強要している状況から運動部不要論が唱えられている。その他には、運動部を運営するコストの問題や、授業の進行に対する問題など、いわゆる一般学生に与える影響なども指摘されている。

一方、一般学生が考える運動部不要の理由とは、関心がない、あるいは不要とは思わないが必要な理由が見つからないとする約2割の学生を除いて、主として運動部の現状に基づくものであった。その中でも最も多く見られた意見は、学業に関わることである。多くの学生が、大学はあくまで勉学をする場であるのに、現状は運動部の学生が学業と運動の両立ができていないし、むしろ運動中心になっていることを指摘している。さらにかかる状況から、運動部が大学の知名度を高めるために利用されているという批判が展開されている。その他、運動部だけ大学のなかで孤立しているイメージがある、あるいは一般学生と運動部の学生との間に距離があるといった意見や、運動部員は物理的・精神的に束縛されていて、自主性が尊重されない傾向にあるという体育会的価値観に対する批判も見られた。本調査では男子学生の約10%、女子学生の約4.2%が否定的立場をとっており、その内運動部での活動経験を有する学生は約7.1%、経験を持たない学生は約10.6%であった。

これに対して、運動部員の中にも散見された不要論の根拠は、約半数近くが必ずしも必要とは考えられないからというものであり、それ以外には、大学は勉学をするための場所であるという意見が目立った。また現状に対する批判、すなわち時間を拘束されていることや、あたかも大学の知名度を高めることが目的であることなども言及されている。

相対的に眺めてみると、教職員、一般学生、運動部に所属する学生のすべてに共通することは、本学運動部の現状から展開される運動部員の学業に関わる問題や、大学の知名度を高めることに対する批判が非常に多いということである。もちろん、大学において運動部は不要と回答した人達すべてが、断固とした姿勢を示しているわけではない。全く必要なしとする約2割程度の人々を除いて、ほとんどが今の状況下においては特別必要とは思えない、あるいはどちらでも良いと考えていると分析することができよう。そしてこれらの見解の意図するところは、ある意味において条件付き肯定見解とも解することができるであろう。その条件を彼らが示した



言葉を借りて説明すると、一般入試で入学した学生で組織された運動部であり、大学のための運動部ではなく、学生のための運動部ということであろう。少なくとも本調査において、全体の約87%がスポーツ推薦入学制度を支持していることを考えると、一般学生だけの運動部を実現するのは困難であるといえる。しかしながら、運動部の学生も指摘しているように、また運動部の存在意義をより高めるためにも、一般学生に開かれた運動部たる必要は十分に認められるところである。いずれにしても、彼らが疑問を抱く本学運動部の現状、とりわけスポーツ推薦入学制度や運動部学生の学業に関する問題は、今後、大学全体で慎重な検討がなされなければなるまい。

#### 4-2-2 運動部への関心に対する否定的見解

前節でも分析されているように、「貴方は普段運動部の活動や競技成績を気にしていますか」という設問に対して、教職員31名（17.1%）、一般学生185名（42.8%）が気にしていないと回答している。教職員の約92.8%、一般学生の約90.3%の人達が、大学に運動部が必要としながらも、実際に日頃から運動部に関心を持っている人は、教職員で約10%、一般学生で約45%少ないことになる。

なぜ、運動部の活動や競技成績を気にしていないのか、その理由をそれぞれ分析してみると、教職員、一般学生ともに同じ理由をもって3つに類化することができる。1つは、スポーツ（観戦）自体に興味・関心がないというものである。2つめは、大学レベルの競技あるいは本学運動部自体に興味・関心が持てないという理由である。ここに該当する意見は、自分には全く知る必要がないことであり興味すらないというものと、興味がないわけではないが、何らかの理由で関心が薄いと示している。後者の意見の背景にある原因のなかで、教職員と一般学生に共通することは、順位や勝敗にこだわる大学スポーツのあり方に対する不満、大学スポーツが見るスポーツとして楽しくないこと、中央大学の運動部の成績が不振であること、あるいは興味ある種目の運動部が強くないことによるものである。さらに一般学生の中には、運動部に所属する友人がいないことや、中学校・高等学校のように運動部との連帯感を感じることが少ないことも、その原因であるとしている者が以外と多い。

教職員、一般学生それぞれが上述の何を理由としているか、その具体的な数を把握することは極めて困難である。何に対して興味・関心がないのかを読み解くことが難しい記述が含まれているし、複数回答をしている人も多いためである。しかし確かなことは、教職員、一般学生ともに7割以上の人々が、上記の1ないし2を理由にしていることである。

3つめの理由は、例えばいつ・どこで試合が行われるのかといった運動部に関する学内情報や、メディアでの報道が少ないために、状況がつかみにくいというものである。もちろんこれは、

2つめの理由に見られた関心が薄い原因ともリンクするであろうが、それよりはもう少し積極的な意見として捉えることができる。これを理由にしているのは約14%の教職員と、約22%の一般学生である。

全体的な印象として、運動部の活動や競技成績を気にしていないと回答したのは、一般学生に多く見られたが、何らかの原因により関心が薄いとする者が多いようである。彼らが記した理由のなかには、「友人・知人」「連帯感」「情報」といった共通のキーワードが頻繁に登場する。一般学生に実施した意識調査の一つに、「貴方には運動部に所属する友人はいますか」という選択式設問があり、友人がいると回答したのは約6割であった。運動部に所属する学生と同じクラスに所属していながらも、意外と交流が少ないのが彼らの現状である。かかる状況では、運動部に関する情報を入手することも難しいであろうし、当然運動部を近い存在として意識することはできないであろう。しかし、現在友人や知人がいないとする学生の約71.2%が、機会があれば運動部の学生と親しくつき合いたいと回答しているように、極めて多くの一般学生は運動部に対して何らかの関心を抱いていると考えることができる。事実、運動部に友人がいれば、普段から運動部の活動や競技成績を気にする、という記述も幾つか見られた。

上述の問題は、学生自身によって解決されなければならないものであろうが、運動部と教職員・一般学生・父兄・卒業生の間の連帯感を高める努力は、大学全体の課題として捉えていく必要があるのかもしれない。現状では指摘にもあるとおり、運動部は遠い存在としてやや孤立しているイメージを持たれているといってもよいであろう。したがって、我々が考えなければならないことは、運動部の活動に関する学内情報を増やしたり、それを工夫することにあると思われる。「運動部に対する大学の広報・支援活動で不足しているものは何ですか」という設問に、一般学生は試合日程などの広報活動や、応援ツアーなどの企画を上位に選んでいる。また、運動部の活動をいつも注目していた教職員のなかに、一般学生や教職員が実際に競技場へ足を運ぶような環境づくりを、大学が果たさなければならないという意見もあった。つまり、競技性がクローズアップされるメディアのスポーツ報道に期待するのではなく、大学内の広報によって運動部の活動が全体に浸透して行くことが、今後大いに望まれるところであろう。

運動部の存在意義からすると、運動部は大学構成員にとって、決して特別な存在であってはならないと考えることができる。

#### 4-2-3 スポーツ推薦入学制度に対する否定的見解

「貴方はスポーツ推薦入学制度を必要であると思えますか」という設問に、全体の約87%が必要であると回答している。一方、必要なしと回答したのは、約10.1%であった。それぞれの内訳を見てみると、必要と考えているのは教職員約86.8%、一般学生約77.3%、運動部学生約

92.4%であり、教職員の約9.3%（17名）、一般学生の約20.4%（88名）、運動部学生の約4.7%（37名）が必要ではないとの見解を示している。

スポーツ推薦入学制度は不必要という立場の意見を見てみると、学業に関することを理由にしているのが特に目につく。教職員の場合、約35%の記述がそれに相当する。その内容とは、体育学部がないにもかかわらず、スポーツで他大学と競争するために一般入試に必要な学力を持たない学生を、スポーツの成績を参考にして入学させていることへの批判、あるいは、入学後運動部の活動が主で勉学がおろそかになっている実状に対する言及であった。その他の理由は、大学の存在理由と矛盾する、大学を宣伝する一つの方法だが不可欠ではない、本来の運動部の存在理由からはずれるといったものである。

一般学生の示した意見は、ほとんどが学業に関わるものであるといってもよく、内容は教職員のそれと同じように、学力を考慮せず入学させることや、大学は学業を修めるところであるのに両立ができなくなるという理由が多かった。それ以外には、本学は体育大学でもないのに、スポーツに優れた者が特別扱いされているのはおかしいし、なによりもスポーツ推薦入学制度によって、一般入学試験の定員が減ってしまうのは問題である。大学のイメージアップや宣伝のためだけに存在しているように思える。運動部はあくまでも課外活動であるべきなのに、この制度のために運動だけやっていたらよい、あるいは運動をやらねばならないという考えが生じてしまう。さらには、スポーツに優れた者ばかりが集まって運動部が強くなってもそこには意味がない、などといった意見が見られた。

また本制度で入学した学生が、各学部へ所属することへの批判も、数名の学生によって展開されている。彼らの主張は、学部へ所属することはその専門的な学問を学習することを意味するにもかかわらず、運動に対する意識が高いうえに、能力的・物理的に学問との両立が難しい状況下で一般学生と席を同じくすることは、矛盾しているというものである。彼らの記した文面からは、本制度自体への批判というよりはむしろ、スポーツ推薦入学者だけの学部やクラスをつくることを提案しているように読み解くことができる。

一方運動部の学生の多くも、大学生の本分とは学業であり、スポーツ推薦制度で入学すると授業についていけない者や、卒業できない者が出現するなど、学業に関わることを本制度不要の理由としている。運動部員のなかには、教職員や一般学生と同じように、大学の宣伝のためにスポーツをすべきでないとする学生もいたが、次のように彼らとは若干違う視点の意見も見られた。それらは、本制度のために一般学生が入部できない状況が生じたり、競技スポーツ以外の様々なスポーツ志向が受け入れられにくいという、ある種一般学生に対する配慮とも取れるものと、すべての大学で本制度が採用されているわけではないので、結局、各大学間のスポー

ツのレベルに不均衡を生むのではないかという、日本の大学スポーツ全体を見据えた意見であった。

教職員、一般学生、運動部学生の間で盛んに展開された、本制度で入学した学生の学業に関する問題は、確かに大学運動部が抱える一つの問題であろう。アンケートの「運動部の活動と学業は両立させるべきだと思いますか」という設問に対し、全体で約82.7%が両立の必要性を認めつつも、教職員、一般学生の約57.9%が、実際には両立できていないと見なしている。一方で、スポーツに秀でていることで大学に貢献しているし、才能の発現は人それぞれであるなどとして、全体の約15.9%の人が、あえて両立をする必要がないと考えているのも事実である。しかし、大学は義務教育ではないので学生各自の判断が基本であるとはいえ、運動部の活動はあくまで課外教育の一環であることや、運動部学生の85%以上が単位を修得して卒業したいと考えている以上、学業の両立は当然必要なものであろう。そしてこれを少しでも具現化するためには、彼らの努力と運動部関係者による指導を除いて、大学が両立できる環境に対して、もう少し配慮する必要があるのではなかろうか。教職員や一般学生も指摘しているように、一般試験入学に満たない学力の学生を大学が入学許可している以上、たとえば特別なクラスや時間割を作るなど、大学側が学業を全うできる受け皿を考慮することが望まれているように思われる。

スポーツ推薦入学制度自体の是非については、運動部の存在意義などとも絡めて慎重な検討がなされなければならないだろう。しかしながら、前述のように少なくとも、本制度を支持する人が圧倒的に多い現状においては、中身の改善を急務と考える必要があろう。本制度を支持する人は多数であるが、現行のままでよいとしているのは僅かしかいないからである。本意識調査によると、希望の多かった改善策とは、各運動部の競技成績や学業成績に応じて推薦枠を見直すというものであった。

#### 4-2-4 運動部の強化に対する否定的見解

今後の運動部の強化を考えるにあたって、現在導入されていないスポーツ奨学金制度を設ける必要性の有無を尋ねたところ、全体で約78.4%の人が導入を希望した。そして、彼らの希望が最も多かったスポーツ奨学金制度のスタイルは、競技実績・学業成績・経済状況を勘案して、①入学金免除、②学費（授業料）免除、③寮費免除、④入学金・学費免除、⑤入学金・学費・寮費免除の5段階のいずれかを適応するというものであった。一方、不要との見解を示したのは、教職員約19.8%（36名）、一般学生約27.1%（117名）、運動部学生約13.8%（109名）であった。

教職員の否定的見解の内容は、奨学金の趣旨からしてスポーツの成績を基準に与えるのは矛

盾であり、学業・スポーツともに優れていれば現行の制度を利用すればよい。学生がさらに運動部の活動に時間を割かなくてはならないようになるし、運動部の存在理由からも逸脱する。体育学部がないのに、スポーツの優秀な学生をあたかも金銭で集めるようなことは、本来の大学の趣旨からはずれる。さらには、スポーツ推薦入学制度自体に反対だからというのが、根本的に反対する人の主な主張である。これに対して、完全否定とは言い難い立場から、様々な競技があるために選考の基準を明確にできず、結局不公平が生じるのではないかと、あるいは現行の奨学金制度を見直せばいいのではないかとといった意見も見られた。

一般学生の間では、大学は学問を探究するところであるから、そのための奨学金だけで十分であるという意見をはじめ、スポーツ大学ではないのに、課外活動である運動部の活動にこれ以上の金銭的補助をすることは、不公平であり、逆にもっと一般学生に還元して欲しいとの意見が特に目についた。それ意外では、スポーツ奨学金制度が実現すると、学費が高くなる恐れがあるし、結果的に運動部の学生を必要以上に縛ることになる。または金銭を個人に与えることでプロスポーツと変わりなくなってしまうという見解や、この制度は大学の宣伝が主たる目的であるような気がするとの意見も繰り返されている。他方、運動部への金銭的援助に対して、肯定的な意味合いを含んでいる意見も若干見られた。すなわちそれは、個人に還元すると本人に大きな精神的負担がかかるので、組織や設備に投資すべきである。あるいは、運動部の活動に要する費用を免除する制度はあってもよいが、学業とは直接関わりがないので学費免除は必要ではないというものであった。

運動部の学生達が示した回答の特徴は、よく分からないとする意見が多かったことや、自分の技術向上だけを考えるようになるので、結果として奨学金を受けていない運動部学生との連帯感が希薄になったり、運動部としての団結が弱まってしまうということを危惧する見解が目立ったことであろう。もちろん、教職員や一般学生と同じように、大学は勉学が重んじられるべきである、また学生スポーツをプロ化してはならないといった意見も見られたが、スポーツの価値を金銭で左右することや、怪我をしたり成績が振るわない場合の問題点に対する、彼ら独自の指摘も展開されている。

一方、スポーツ奨学金制度の導入だけに限らず、広く本学の運動部を強化すべきか否かを尋ねたところ、教職員と一般学生をあわせた約66.1%が強化が必要と回答した。これに対して反対の立場を示したのは、教職員約17%（31名）、一般学生約32.9%（142名）であった。

あえて強化が必要でないとする理由を見てみると、最も多かったのが運動部は高い水準にあるので、今のままで十分というものであった。教職員、一般学生ともに約4割がこれを理由としている。教職員に次いで多く見られたのは、現在十分に強化されているので、今後は強化で

はなく現状の改善をすべきとする意見であった。一般学生のなかには、これ以上強化をしますます学業の両立が困難になる、あるいはコストがかかることへの指摘も目立った。これ意外には、参加型のスポーツ人口が育成されない、上からの強制的な介入ではなくもっと学生の自主性に任せるべき、スポーツは楽しむもので勝敗だけにこだわるべきではない、学生の健康と体力の増進に主眼を置くべき、などといった見解があった。

これとは逆に、運動部は強化すべしと回答した人達は、優秀な学生の確保、専任の指導者の確保、スポーツ奨学金制度の確立、寮や合宿所の整備・拡充などを、今後取り組まなければならない事柄であると考えている。先で取り上げたスポーツ奨学金制度も、強化のために必要なものとして上位に挙げられている。運動部の強化のために、スポーツ奨学金制度を導入している大学は、すでに幾つか存在する。しかし本学においては、現在この制度の導入の有無について活発に論議されているわけではない。今回の調査では確かに導入に賛成する人が多かったが、反対意見に見られたように、これは大学や運動部の存在理由・意義、あるいはスポーツ倫理に抵触する問題であるし、さらに財源の問題なども含めて、さまざまな角度からの検討が必要不可欠といえる。

一私立大学として、果たして本学運動部をもっと強化すべきか否か、これは社会における大学の役割を根底に見据えて、運動部の存在意義や、現在の運動部を取り巻く諸問題などを鑑みながら検討されるべき重要な事柄であろう。運動部の今後の指針に相当するものであるからである。そして検討に際しては、本節で取り上げたすべての否定的見解を十分に考慮していかなければならないと考える。

(青木 清隆)

#### 4-3 自由記述にみられた運動部の理想像について

本節では、アンケート末尾の自由記述欄を中心に記述の内容を分析し、対象群別にみた運動部の在り方、理想像についての意見を総括して、今後の検討材料とすることを目的とした。

運動部員の自由記述については、部の理想像というよりも、現状に対する改善希望を記述したものが圧倒的に多く、その多くは4章1節、2節において、既に考察済みである。最も頻繁に見られた記載内容は、「学業との両立」、もしくはそのための改善・打開策に関する意見である。部員からは特に一般学生とは根本的に立場が異なり、前提となる学力も異なるので、特別な配慮なくしては学業、スポーツ双方に悪影響を及ぼすといった見解が多くみられた。

一方で、「寮の設備」、「部内規則」、「個人の態度」を変えることによって、この問題を解決することは可能であるし、またそう努力すべきであるとの記述も僅かながらみられた。その次に記述が多かった内容は、「部の運営」や、「部内の人間関係」に関するものと、「施設・指導者」

に関するものである。具体的には、学生による自主的、自律的運営を理想とし、部の規則や、過度の上下関係をなくして、良好な人間関係とチームワークを重視した部活動を望む意見が多く見られた。その他、ソフト、ハード両面からの練習環境改善の要望も多かったが、当然各部により傾向が異なるので、今回の分析結果からは除外した。

一般学生の自由記述では、「運動部が特別な存在であってはならない」、「一般学生との接点が少ない」、「スポーツ推薦以外の学生も受け入れるべき」、「学生に開かれた活動をして欲しい」といった内容の指摘が非常に多くみられた。その他、記述の多かった内容としては、他の対象群同様、「学業との両立の必要性」を強く訴えるもの、また、そのための対策を要求するもの、「基本的に両立は不可能なので、運動部を別組織にすべき」とするものなどが上げられる。

4章-2節でも指摘したように、運動部学生、ひいては彼等の活動が、一般学生からはかなり遊離した存在である、少なくともそのように感じられるという問題点が、自由記述からも顕著にうかがえた。一方で、ドライであるとか、クールであるという学生気質が指摘されるなかにも、「運動部が身近な存在であればもっと応援したい、頑張してほしい」、「選手と友達になりたい」、といった好意的な意見も多く、部の活動を通して一体感を醸成しうる可能性が残されていると推察される。いうまでもなく一般学生は、大学構成員の中核であるし、学友会費の形で意識するとせざるとに関わらず、部活動の支持母体たるべき存在である。スポーツのプロ化やメディア化で、スター選手とファン、観衆との人間関係が、或る意味で非常に無機的なものになったといわれる状況の中では、かえって大学スポーツのような存在が、その機能を代替しうるかもしれない<sup>24)</sup>。いずれにしても、運動部（員）にとっても何等不都合を伴わず、比較的容易に着手しうる課題と考えられ、後述するように教職員においても改善希望の多かった問題点であるだけに、何等かの対策が必要であろう。

教職員の自由記述も、項目別にみる限りでは、前節までに取り上げられてきた内容が殆どであるが、立場上、特に学業との両立などについては、かなり具体的かつ切実な指摘がみられた。これらの一部であるかもしれないが、熱心で具体的な問題提起や提案については、興味深い内容も多く、今後の課題としてより詳細な検討を加えるべきものと認識している。

記載された幾つかの改革案を要約すると、以下のようにまとめられよう。

- 運動部は大学に所属しながらも、部外との交流が少なく実態がよくわからないし、親しみもわからない。部活動をよりオープンな存在とし、一般学生に認知されるように、スポーツ新聞、試合日程の広報活動、チケット購入の便宜、優秀タレ幕作成等の工夫をこらすべきである。
- 今後より重要度を増すであろう、健康スポーツや生涯スポーツの機会を大学構成員全体に与えるべきであり、運動部（員）も何等かの形でそのような部活に関わりをもつ。

- 全種目を一括して扱うことは不可能であり、トップスポーツを目指す部、心身の健全育成を第一とする部、メジャー種目とマイナー種目等の選別が必要。
- 女子選手を増やし、女子部を強化する。
- OB会の支援の在り方を検討すべき。特に指導者体制の見直しが必要。
- 優秀な人材確保をめざして、奨学金制度を含めた支援体制を考慮するべきである。
- スポーツ推薦入学生を専門に受け入れるコース・学科の新設（現状では、法学部に設置するのが望ましいとの意見有り）もしくは特別教育体制（クラス）の設立が必要。

数的に見れば、最も指摘の多かった点は、「勉学条件と指導体制の整備」に関する意見であるが、重要な指摘としては、そもそも運動部に対する大学側の方針が曖昧であり、この点の確認なくしては、何も提案できないとする意見であろう。曰く、現在のような運動部を全学的に認知するならば、単位取得等を含めた勉学条件の支援体制や、専任コーチの配置・手当て等について当然考慮されるべきであるし、それを認めないならば、スポーツ推薦制度も含めた受け入れ体制の検討が必要であろう。

先行研究においても確認されている通り（2章参照）、大学に限らず、教育機関である学校の部活動の位置づけがそもそも曖昧であり、中でも運動部は、その存在基盤や体質的な問題について明治期の発足以来十分な検討が加えられないまま、綿々として同質の課題を引きずり続けていると指摘される<sup>25)</sup>。当然のことながら、アンケート回答の中にも、運動部員に対して“個人の挑戦であると同時に大学の名誉のために自己を犠牲にして日々努力している”との好意的な指摘もあれば、“学業については大目に見てもらうのが当たり前のような横柄な授業態度で、一般学生に悪い印象を与えている”との厳しい指摘が混在している。

もちろん運動部、特に本学のように歴史のある運動部からは、幾多の優れた人材を輩出し、それらの人々の活躍が卒業生にとっても心の支えとなり、励みとなってきたことは疑いのない事実であろう。一方で、長き伝統の故に手をつけかねてきた諸問題が多いことも否定出来ない。今回の結果分析では教職員を一括して扱ったが、回収された回答をみる限りでは、教員に比し、相対的に職員において部活動に関する好意的、建設的な意見が多くみられた。教員の回答率の低さは、同時にこの問題に対する教員の無関心、もしくは関わりあいたくないとする意向の現れとも解釈しえよう。

本調査の限られた自由記述から、大学構成員の総意としての「理想的運動部」のような具体案を提起することは困難であるが、分析作業と調査結果を通して、今後の課題、問題の所在についてのある程度の共通認識を抽出することはできたと考える。



## 5. おわりに

今回筆者達は、大学運動部が置かれている状況を把握し、その位置づけと今後の展開の方向性を探るための基礎資料収集の一環として、このアンケート調査を企画した。

回収率等の結果から、配布一回収の方法について改善すべき点が多いことは明らかであり、回答中に設問方法の不適切さについての指摘もよせられたことも考慮すれば、この結果を本学構成員の意向として結論することは拙速であろう。また、本調査はあくまでも一大学における傾向を示したものであるが、わが国における大学運動部の一典型として、回答中、特に自由記述の中には興味深い指摘が多かった。調査結果から、部活動やスポーツ全般を取り巻く環境が変わりつつある中で、大学運動部の位置づけをどのように共通理解し、支援していくかを考える上で様々な視点を得られたことは間違いない。また、今回は、部員・一般学生・教職員というくくりの中で、部活動に関する意見を比較する点に重点を置いたので、今回得られた回答の中にも充分分析されていない項目や視点がまだ多数存在する（具体的には、運動部員の退部に関する設問や、部別の集計結果、男女差、在職年数等の立場による意見の相違等々）。

十分とはいえないまでも、アンケートに協力いただいた多くの方々の貴重な意見を集約し、活用していくためにも、さらなる分析・研究が必要であろう。今後は特に本学運動部の当事者へのインタビューや、他大学、大学以外のスポーツ関係者からの意見聴取を通して、問題点のより深い理解や、解決の糸口を見いだすことが可能になると考えている。

同時に、改善案として提唱された意見の中には、“少しずつ”でも、また“すぐに”でも取り組める内容を含むものもあり、大学として早急な取組みが望まれるところである。制度の歪みやシステムの不備の最も直接的な被害者は、運動部員やその関係者に他ならず、一部ではあるかもしれないが、長期にわたって続けられてきたそれらの人々の努力や問題意識が認識され、広く検討の場にのせられる必要がある。

大学、またわが国における大学運動部の歴史は重く、良き伝統は受け継がれるべきであるが、これを取り巻く環境の変化は著しく、変革の足音はすぐそこまで迫っているとの認識が不可欠であると考ええる。

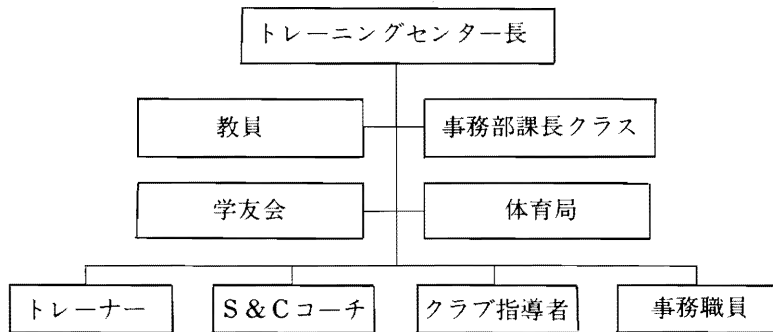
（成瀬 璋・加納 樹里）

（付記） 1998年12月18日は本論文の提出締切日でしたが、同日早朝、筆頭筆者の商学部成瀬先生の訃報が届きました。悲しい偶然ですが、本稿が先生の絶筆となりました。心よりご冥福をお祈り致します。

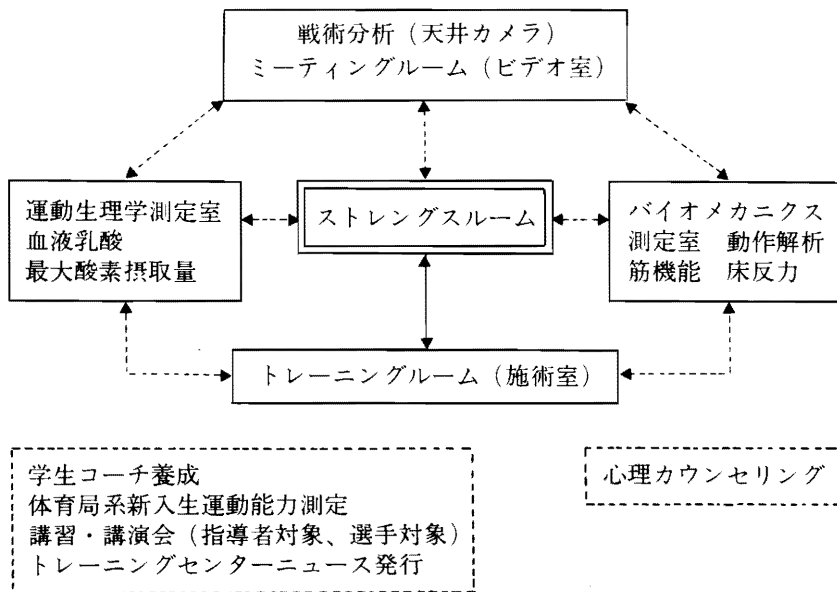
## 参考文献

- 1) 成瀬璋, 深瀬吉邦, 青木清隆, 長鐵翁, 加納樹里, 関鎮正, 平栗健, 三須徳次, 柳井宗一郎, 柳宏「企業における競技スポーツについて 第1報」中央大学保健体育研究所紀要, 12号, 1994
- 2) 成瀬璋, 加納樹里, 柳井宗一郎, 木島章文「企業における競技スポーツについて 第2報」中央大学保健体育研究所紀要, 14号, 1996
- 3) 美斎津二郎「曲がり角の企業スポーツ」朝日新聞記事, 1998.03.20.付
- 4) (株)日本プロサッカーリーグ「HOMETOWNS Jリーグクラブとホームタウンの現在・未来」, (株)体育施設出版, 1996, P.6-13
- 5) 厨 義弘他編「地域スポーツの創造と展開」, 大修館書店, 1990
- 6) 関春南「保健体育審議会答申(1997年9月)の批判的検討」, 一橋大学スポーツ科学研究室・研究年報, 1998
- 7) 内海和雄「部活動改革」, 不昧堂, 1998, P.193
- 8) インタビュー「研究と一体化した理想的なトレーニングの現場」Coaching Clinic 誌, 9月号, 1995, P.20
- 9) レポート「トレーニング・システムの構築—東海大学と滝谷大学の場合—」, Sportsmedicine Quarterly, No.22, 1998, P.52-69 (参考資料1)
- 10) 唐木国彦「やわらかいスポーツと部活動」, 体育科教育, 1995.1. P.18-20
- 11) 椎橋隆幸「スポーツと勉学の両立をめざして」, 中央評論218号, 「大学スポーツ」, 1996年12月号, P.28
- 12) 変革への指針: 「学業とスポーツ」中大スポーツ新聞記事, 1998.07.09付
- 13) 中村敏雄「日本のスポーツ環境批判」, 大修館書店, 1995年
- 14) 中村敏雄「クラブ活動入門」, 高文研, 1977年
- 15) 高部岩雄「運動部集団の思想性」, 「体育科教育」, 1月号, 1970年
- 16) 小村渡岐鷹「学生スポーツの真のあり方を考え直す時期」, 「体育科教育」, 12月号, 1984年
- 17) 岡崎助一「運動部活動はどこへ行くか」, 「体育科教育」, 7月号, 1991年
- 18) 多田納秀雄, 「『同じ釜の飯』考—日本のスポーツの精神風土—」, 中村敏雄編「スポーツコミュニケーション論」, 創文企画, 1995年, P.44-45
- 19) 菅田圭次「勝利追求が運動部集団に及ぼす影響についての一考察」, 東京工芸大学女子短期大学部「飯山論叢」, 第2巻/第1号, 1985年, P.151-164
- 20) 井上一男「学校体育制度史」, 大修館書店, 1970年, P.245-249
- 21) 島村栄一「日本の大学に於ける運動部の実態調査」, 「立教大学研究報告」, 第3号, 1957年, P.23-36
- 22) 山本利春「大学内のトレーナー活動」, Sportsmedicine Quarterly, No23, 1998, P.76-82
- 23) 武藤芳照, 村井貞夫, 鹿倉二郎編, 「スポーツトレーナーマニュアル」, 南江堂, 1996, P.2-8
- 24) 高津勝「スポーツ・商業主義・マスメディア」, 「スポーツは誰のために—21世紀への展望」, 大修館書店, 1995, P.79
- 25) 「部活動は今」(ミズノ・スポーツライター賞受賞作品), 埼玉新聞連載記事, 1997.01.01-97.12.30. 全53回連載

参考資料 1



龍谷大学トレーニングセンターの組織図



龍谷大学トレーニングセンターの構造

(注) 課外活動を大学が組織だって支援すべく構想されたが、現在では学生部所属の専従トレーナーを置き、一般学生、教職員も利用している。

施設を利用した体育の授業や、スポーツサイエンスコースも新設された。

Sportsmedicine Quarterly 「トレーニング・システムの構築 —東海大学と滝谷大学の場合—」

1998, No.22, p.52～69より引用（文献9・脚注筆者）

## 参考資料 2

## スポーツ能力に優れた者の推薦入学試験結果 (1998年度)

学部	学 科・専 攻	一 部			二 部		
		志 願 者	受 験 者	合 格 者	志 願 者	受 験 者	合 格 者
法 学 部	法 律	17( 2)	17( 2)	17( 2)	6( 0)	6( 0)	6( 0)
	政 治	10( 0)	10( 0)	10( 0)	5( 0)	5( 0)	5( 0)
	国際企業関係	2( 0)	2( 0)	2( 0)	—	—	—
	計	29( 2)	29( 2)	29( 2)	11( 0)	11( 0)	11( 0)
経 済 学 部	経 済	23( 0)	23( 0)	21( 0)	11( 0)	11( 0)	10( 0)
	産 業 経 済	22( 0)	22( 0)	22( 0)	0( 0)	0( 0)	0( 0)
	国 際 経 済	1( 0)	1( 0)	0( 0)	0( 0)	0( 0)	0( 0)
	公 共 経 済	0( 0)	0( 0)	0( 0)	—	—	—
	計	46( 0)	46( 0)	43( 0)	11( 0)	11( 0)	10( 0)
商 学 部	経 営	16( 2)	16( 2)	14( 1)	5( 1)	5( 1)	4( 1)
	会 計	11( 1)	11( 1)	11( 1)	3( 0)	3( 0)	3( 0)
	商 業・貿 易	14( 0)	14( 0)	12( 0)	4( 0)	4( 0)	4( 0)
	金 融	6( 0)	6( 0)	5( 0)	—	—	—
	計	47( 3)	47( 3)	42( 2)	12( 1)	12( 1)	11( 1)
理 工 学 部	数 学	0( 0)	0( 0)	0( 0)	—	—	—
	物 理	0( 0)	0( 0)	0( 0)	—	—	—
	土 木 工	1( 0)	1( 0)	1( 0)	—	—	—
	機 密 機 械 工	0( 0)	0( 0)	0( 0)	—	—	—
	電 気・電 子 工	0( 0)	0( 0)	0( 0)	—	—	—
	応 用 化 学	0( 0)	0( 0)	0( 0)	—	—	—
	経 営 シ ス テ ム 工	0( 0)	0( 0)	0( 0)	—	—	—
	情 報 工 学	2( 0)	2( 0)	2( 0)	—	—	—
計	3( 0)	3( 0)	3( 0)	—	—	—	
文 学 部	文 学	19( 7)	19( 7)	18( 6)	8( 0)	8( 0)	8( 0)
	史 学	10( 1)	10( 1)	9( 1)	—	—	—
	哲 学	3( 0)	3( 0)	3( 0)	—	—	—
	社 会 学	9( 2)	9( 2)	8( 2)	—	—	—
	教 育 学	6( 3)	6( 3)	5( 3)	—	—	—
計	47(13)	47(13)	43(12)	8( 0)	8( 0)	8( 0)	
総 合 政 策 学 部	政 策   昼 主	3( 0)	3( 0)	2( 0)	—	—	—
	夜 主	2( 0)	2( 0)	2( 0)	—	—	—
	国 際 政 策 文 化	2( 0)	2( 0)	2( 0)	—	—	—
	計	7( 0)	7( 0)	6( 0)	—	—	—
合 計		179(17)	179(17)	166(16)	42( 1)	42( 1)	40( 1)

※ ( ) 内は女子の内数

(中央大学学員会事務局提供：学員時報 363/98' 4月号より引用)

## 参考資料 3

（中央大学学友会事務局提供資料より）

## 中央大学体育部 大会結果（1998年4月～1998年10月4日）

## (1) 体育連盟国内関係（優勝のみ）

## 陸上競技部

## '98群馬リレーカーニバル

（兼アジア選手権・アジア大会日本代表選考会）（4/25・26）群馬・敷島陸上競技場

三段跳び 16M07 優勝 小栗 忠（法3）

第46回兵庫リレーカーニバル（4/26）兵庫・神戸ユニバー記念競技場

200m 21秒04 優勝 渡辺 辰彦（法4）大会新

第61回東京選手権（5/2～3）国立競技場

走り幅跳び 7 m57 優勝 伊藤 健一（総4）

三段跳び 15m00 優勝 佐々木直樹（経1）

円盤投げ 43m37 優勝 藤原 直樹（法3）

第77回関東学生対校選手権（5/15～17）横浜国際総合競技場

200m 20秒97 優勝 渡辺 辰彦

走り幅跳び 7 m61 優勝 伊藤 健一

三段跳び 15m94 優勝 小栗 忠（法3）

第9回日本学生種目別選手権（6/27）神奈川・平塚競技場

200m 21秒31 優勝 渡辺 辰彦

400m障害 50秒99 優勝 岩崎 淳（法2）

第11回南部忠平記念大会（7/4～5）北海道・札幌円山陸上競技場

200m 21秒13 優勝 渡辺 辰彦

400mリレー 41秒38 優勝 渡辺 辰彦（アジア選手権代表チーム第4走者）

第66回日本学生対校選手権（9/11～13）国立競技場

三段跳び 優勝 小栗 忠

走り幅跳び 優勝 伊藤 健一

## 相撲部

全国学生個人体重別選手権（10/4）

90kg級 優勝 満永 智久（商4）

## 水泳部

第40回日本短水路選手権（4/4～5）東京・辰巳国際水泳場

50m自由形 22秒28 優勝 山野井智広（経3）短水路日本新

200m自由形 1分48秒59 優勝 伊藤 俊介（法4）

400m自由形 3分48秒25 優勝 市川 洋介（法2）

女子 50m自由形 25秒02 優勝 源 純夏（法1）短水路日本新

100m自由形 55秒08 優勝 源 純夏

100m平泳ぎ 1分6秒87 優勝 田中 雅美（法2）短水路日本新

200m平泳ぎ 2分21秒94 優勝 田中 雅美 短水路日本新

100m背泳ぎ 59秒35 優勝 中村 真衣（法1）

第74回日本選手権

（兼バンコク・アジア大会代表選手選考会）（6/11～14）東京・辰巳国際水泳場

50m自由形 22秒84 優勝 山野井智広 準決勝日本新（22秒82）

100m自由形	51秒01	優勝	伊藤 俊介
200m自由形	1分50秒83	優勝	市川 洋介
女子 50m自由形	25秒56	優勝	源 純夏 日本新
100m自由形	55秒49	優勝	源 純夏 日本新
100m平泳ぎ	1分9秒18	優勝	田中 雅美 日本新
200m平泳ぎ	2分26秒96	優勝	田中 雅美
100m背泳ぎ	1分1秒19	優勝	中村 真衣
200m背泳ぎ	2分11秒52	優勝	中村 真衣

## 第74回日本学生選手権 (9/3～5) 東京・辰巳国際水泳場

団体優勝 5年連続5回目

男子 50m自由形	優勝	山野井智広 大会新
100m自由形	優勝	伊藤 俊介 日本新
200m自由形	優勝	伊藤 秀介 (法4) 大会新
400m自由形	優勝	市川 洋介 大会新
100m背泳ぎ	優勝	大石 隆文 (総4) 大会新
200m個人メドレー	優勝	児島 康介 (法2)
400mフリーリレー	優勝	石田 徳秀 (法3)・山野井智宏・伊藤 秀介・伊藤 俊介 日本新
400mメドレーリレー	優勝	大石 隆文・伊藤 俊介 (経4)・川又 敬千 (経2)・伊藤 俊介
800mフリーリレー	優勝	市川 洋介・佐々木 武 (商2)・伊藤 俊介・伊藤 秀介 日本新
女子 50m自由形	優勝	源 純夏 日本新
100m自由形	優勝	源 純夏 大会新
100m背泳ぎ	優勝	中村 真衣 大会新
200m背泳ぎ	優勝	中村 真衣 大会新
100m平泳ぎ	優勝	田中 雅美 大会新
200m平泳ぎ	優勝	田中 雅美 大会新

## 第53回国民体育大会 (9/12～15) 神奈川・相模原市

成年男子100m自由形	優勝	伊藤俊介 大会新
200mリレー	優勝 (兵庫)	伊藤 秀介 (第2泳者)・石川 徳秀 (第3泳者)・ 伊藤 俊介 (第4泳者) 日本新
400mメドレーリレー	優勝 (愛知)	大石 隆文 (第1泳者)
混成男子200mフリーリレー	優勝 (兵庫)	伊藤 俊介 (第4泳者)
成年女子100m自由形	優勝	源 純夏
100m背泳ぎ	優勝	中村 真衣 大会新
100m平泳ぎ	優勝	田中 雅美
200m個人メドレー	優勝	中村 真衣 大会新
200mフリーリレー	優勝 (東京)	田中 雅美 (第3泳者) 大会新
400mメドレーリレー	優勝 (東京)	田中 雅美 (第2泳者) 大会新
200m平泳ぎ	優勝	田中 雅美 大会新

※茨城の山野井智広 (第1泳者) は50m自由形の日本新 (22秒71)

**準硬式野球部**

第30回清瀬杯全日本大学選手権（8/18～21）愛知・瑞穂球場他  
優勝 2年連続4度目

**馬術部**

全日本学生選手権（9/27）馬事公苑  
複合＝減点法 優勝 尾形 和幸（経済4）

**柔道部**

第17回全日本学生体重別選手権（6/20～21）東京・日本武道館  
81キログラム級 優勝 広川 充志（法3）  
100キログラム級 優勝 高橋 宏明（文4）

**女子陸上競技部**

第77回関東学生対校選手権（5/15～17）横浜国際総合競技場  
100m障害 13秒78 優勝 熊崎 智子（文4）

第61回東京選手権（5/2～3）国立競技場

400m 56秒58 優勝 早福 弥美（文2）

400mリレー 47秒08 優勝 梅田 映子（文2）、目宅 裕美（文3）、丸尾 由美（文4）、  
原田千香子（文2）

関東学生新人選手権（6/1）上尾陸上競技場

100m 優勝 梅田 映子

200m 優勝 砂押 里奈

400m 優勝 山田 佳子（文1）

**漕艇部**

第20回全日本軽量級選手権（7/3～5）戸田漕艇場

エイト 優勝

第25回全日本大学選手権（8/21～23）戸田漕艇場

エイト 優勝 2年連続9度目

**自転車競技場**

第67回全日本アマチュア選手権大会（6/27～28）山梨・境川競輪場

スプリント(200m) 11秒24 優勝 成田 和也（経2）

第40回全日本学生選手権（7/26～7/27）大阪・関西サイクルSC

スプリント4000m速度競争 優勝 武山 誠（文3）

々 ケイリン 優勝 時田 大助（経2）

第54回全日本大学対抗選手権（8/29～31）石川・県立自転車競技場

ケイリン 優勝 時田 大助

スプリント 優勝 成田 和也（経2）

**重量挙げ部**

全日本学生個人選手権優勝大会（5/9～11）東京・大田区体育館

108キロ超級 優勝 樋口 忠之（総3）342.5キロ

（スナッチ145キロ、ジャーク192.5キロ）

**射撃部**

春季関東学生選手権（6/5～7）朝霞射撃場

エアライフル立射（60発）

583点個人 優勝 福井 将人 (商1)  
 1724点 団体優勝  
 スモールボアフリーライフル三姿勢個人 (60発)  
 566点 優勝 松島 愛 (文3)  
 1692点 団体優勝  
 日本学生選抜選手権 (7/4～5) 大阪・能勢町ライフル射撃場  
 スモールボアフリーライフル伏射個人 (60発, 決勝10発)  
 682.4点 優勝 山下 敏和 (商4)  
 スモールボアフリーライフル3姿勢個人 (120発, 決勝10発)  
 1236.9点 優勝 山下 敏和  
 スモールボアフリーライフル3姿勢個人 (60発, 決勝10発)  
 660.8点 優勝 松島 愛  
 秋期関東学生選手権 (9/9～12) 朝霞射撃場  
 スモールボアフリーライフル伏射個人 (60発)  
 優勝 山下 敏和  
 スモールボアフリーライフル3姿勢団体 (60発)  
 優勝

#### 拳 法 部

第11回東日本大学リーグ戦 (5/24) 早稲田大学記念館  
 団体優勝  
 第11回全日本大学選抜選手権 (6/7) 大田区立体育館  
 団体優勝

#### ソフトテニス部

全日本学生選手権 (8/10～13) 千葉白子・サニー TC  
 優勝 渡辺 将司 (文3)・大門 俊彦 (商3) 組

#### ハンドボール部

第20回東日本学生選手権 (8/7～8/12) 石岡運動公園体育館  
 優勝

#### (2) 国際大会関係

第1回世界学生ウェイトリフティング選手権 (4/21～4/27) イスラエル・Ramat・Gan市  
 105超級 優勝 樋口 忠之 (総3)  
 アジア・オセアニア レスリング選手権 (6/5～6/12) フィリピン・マニラ  
 69kg フリースタイル 優勝 宇津木伸久 (商1)  
 97kg フリースタイル 3位 諏訪間幸久 (経4)  
 第12回アジア陸上選手権  
 400mリレー 2位 (第1走者) 渡辺 辰彦 (法4)

以 上



参考資料 4	運動部員向アンケート
--------	------------

## 大学運動部に関するアンケート

大学運動部は長年にわたって日本のスポーツ界の中心的役割を担ってきておりましたが、昨今は企業運動部に主役の座を奪われてしまっているとと言っても過言ではありません。

スポーツ推薦制度を導入し、積極的に強化を図っている大学は増加の一途を辿っています。しかし原因は種々あるにせよ企業運動部との立場を逆転させるまでには至っていません。

この度、私達は大学運動部の社会的意義と発展の方向性を探るべく、調査・分析する計画をたてました。

つきましては、「大学運動部」や「選手生活」に関する貴方自身の考え方やご意見をお聞かせ戴きたく、お手数とは存じますが宜しくご協力の程をお願い申し上げます。

なお、このアンケート結果は本研究以外は一切使用致しませんので、ご迷惑をお掛けすることはありません。

1997年6月1日

中央大学 保健体育研究所

企業スポーツ研究班

主査 成瀬 璋

- (1) 競技種目 ( )
- (2) 性別
  1. 男 2. 女
- (3) 年齢 ( ) 歳
- (4) 学年 ( ) 年次生
- (5) 入学区分
  1. スポーツ推薦 2. 一般入試 3. 学校長推薦 4. 付属高校
  5. 自己推薦
- (6) 部内での役割
  1. 主将 2. 副主将 3. 主務 4. 副主務 5. トレーナー
  6. レギュラー 7. その他

※ 該当する項目の番号を○で囲んでください。

体育連盟所属運動部員アンケート

I. 運動部の存在についてお尋ねします。

Q 1 : 運動部は大学にとって必要な存在であると思いますか。「はい」のかたは1を、「いいえ」の方は2を○で囲んでください。 (1・2) 1

※以下同種の質問(「はい」または「いいえ」を問う)に対する回答方法は同じです。

Q 2 : Q 1にて「はい」と回答された方のみお答え下さい。

その理由を下記の項目群から上位3項目を選び、該当する番号を右欄に記入して下さい。

※以下同種の質問に対する回答方法は同じです。

1 : 大学の知名度を高めることに役立つ。	1 位	2
2 : 受験生の獲得に役立つ。		
3 : 大学構成員(教職員・学生)の連帯感の醸成に役立つ。		
4 : 大学構成員の士気高揚に役立つ。	2 位	3
5 : 学生(卒業生)の連帯感の醸成に役立つ。	3 位	4
6 : 大学生の心身の健全な育成を保障する場である。		
7 : 日本のスポーツ界の発展の為に役立つ。		
8 : その他 ( )。		

Q 3 : Q 1にて「いいえ」と回答された方のみお答え下さい。

その理由を度合いの強い順にお書き下さい。幾つでも結構です。

※以下同種の質問に対する回答方法は同じです。

1 位 :
2 位 :
3 位 :

II. 選手活動についてお尋ねします。

Q 4 : 貴方は何の為に選手活動をしているのでしょうか。上位3項目を選んで下さい。

1 : 大学の知名度を高める為。	1 位	5
2 : 大学構成員(教職員・学生)の連帯感を持たせる為。		
3 : 大学構成員の士気高揚の為。	2 位	6
4 : 学生(卒業生)の連帯感を持たせる為。		
5 : 所属する部の名誉の為。	3 位	7
6 : 自分の名誉の為。		
7 : 自分の生き甲斐の為。		
8 : 自分の健康・体力づくりの為。		
9 : 就職(プロ選手を含めて)の為。		
10 : スポーツ推薦で入学した為。		
11 : オリンピック・世界選手権大会等の国際大会に出場する為。		
12 : その他 ( )。		



Q 7 : 貴方が選手活動を行う為の現在の環境で、改善すべきであると考えerる点は何ですか。上位 3 項目を選んで下さい。

1 : 練習時間の確保.	1 位		14
2 : 練習場の確保.	2 位		15
3 : 練習用具・器具の充足.	3 位		16
4 : トレーニング施設 (器具・機材を含めて) の充実.			
5 : 指導体制.			
6 : 専任トレーナーの確保.			
7 : 教職員の協力体制.			
8 : クラスの友人達の協力体制.			
9 : OB 会の支援体制.			
10 : 保健センターの医療体制 (外科医・整形外科医の確保).			
11 : 寮・合宿所の生活環境.			
12 : その他 ( ) .			

Q 8 : 貴方は今までに退部したいと思ったことがありますか。

( 1 ・ 2 ) 17

Q 9 : Q 8 にて「はい」と回答された方のみお答え下さい。

その理由について上位 3 項目を選んで下さい。

1 : 他の部員との人間関係がうまくいかなかった.	1 位		18
2 : 指導者 (監督・コーチ) の指導方針が納得いかなかった.	2 位		19
3 : 練習が厳しかった.	3 位		20
4 : 練習の効果が見られなかった.			
5 : 学業との両立が困難になった.			
6 : 他にやりたいことができた.			
7 : 自分の時間が欲しかった.			
8 : そのスポーツ種目が嫌になった.			
9 : 他の種目に転向したかった.			
10 : 経済的な負担が大きかった.			
11 : 怪我等の健康上の理由.			
12 : その他 ( ) .			

Q10 : Q 9 に回答された方のみお答え下さい。

退部したい気持ちを踏みとどませた理由を度合いの強い順にお書き下さい。

1 位 :
2 位 :
3 位 :



Q19：Q17において「いいえ」と回答された方のみお答え下さい。  
その理由について度合いの強い順にお書き下さい。

1位：
2位：
3位：

IV. 部の強化についてお尋ねします。

Q20：スポーツ推薦入学制度は必要な制度であると思いますか。

(1・2) 32

Q21：Q20において「はい」と回答された方のみお答え下さい。

現行の制度について改善して欲しい点を上位3項目選んで下さい。

1：全体の推薦枠を増加させる。
2：男子選手の推薦枠を増加させる。
3：女子選手の推薦枠を増加させる。
4：各運動部の競技成績や学業成績に応じて推薦枠を見直す。
5：競技種目に応じて推薦枠を見直す。
6：競技上の推薦基準を緩やかにする。
7：学業上の推薦基準を緩やかにする。
8：全体の推薦枠を減少させる。
9：競技上の推薦基準を高くする。
10：学業上の推薦基準を高くする。
11：現行のままでよい。
12：その他 ( )。

1位		33
2位		34
3位		35

Q22：Q20において「いいえ」と回答された方のみお答え下さい。  
その理由について度合いの強い順にお書き下さい。

1位：
2位：
3位：

Q23：現在、中央大学にはスポーツ奨学金制度がありませんが、この制度を設ける必要があると思いますか。

(1・2) 36

Q24：Q23において「はい」と回答された方のみお答え下さい。

導入するとすれば、どれを希望しますか。1つだけ選んで下さい。

- 1：競技実績に基づいてランキングを定め、それによって下記の5段階に分ける。
- 2：学業成績を勘案してランキングを定め、それによって下記の5段階に分ける。
- 3：家庭の経済状況を勘案してランキングを定め、それによって下記の5段階に分ける。
- 4：競技成績・学業成績・経済状況を勘案してランキングを定め、それによって下記の5段階に分ける。

- ① 入学金免除
- ② 学費（授業料）免除
- ③ 寮費免除
- ④ 入学金・学費免除
- ⑤ 入学金・学費・寮費免除

37

Q25：Q23において「いいえ」と回答された方のみお答え下さい。

その理由について度合いの強い順にお書き下さい。

- 1位：
- 2位：
- 3位：





参考資料 5	一般学生向アンケート
--------	------------

## 大学運動部に関するアンケート調査のお願い

大学運動部は長年にわたって日本のスポーツ界の中心的役割を担ってきましたが、昨今は多くの競技種目で主役の座を追われているのが現状です。

18歳人口の激減が見込まれる昨今、大学運動部を取り巻く社会的環境も大きく変わりつつあります。新しいプロスポーツの誕生、ニューススポーツやアウトドラスポーツの流行、スポーツコマмерシャリズムに伴う競技レベルの高度・専門化など、スポーツの可能性が多種・多様化する中で、競技に取り組む学生達の意識も変容を余儀なくされていると思われます。

そこで、今般私達は現在の大学運動部が置かれている状況を把握し、その位置付けと今後の展開の方向性を探るべく、アンケート調査を実施することと致しました。

ご多忙中お手数とは存じますが、上記の趣旨をご理解頂きました上で、貴方の「大学運動部」、「運動部選手」に関するお考えをお聞かせ頂きたく、ご協力の程をお願い申し上げます。

なおアンケート結果は、調査・研究以外の目的に使用することは一切ございません。

1997年7月1日

中央大学 保健体育研究所

企業スポーツ研究班

主査 成瀬 璋

\*\*\*\*\*

《記入・該当する数字に○をつけて下さい》

- 1) 所属学部
  1. 法学部      2. 経済学部      3. 商学部
  4. 文学部      5. 理工学部      6. 総合政策学部
- 2) 学 年
  1. (1年生)      2. (2年生)      3. (3年生)      4. (4年生)
  7. (その他)      6. (大学院生)
- 3) 年 齢  
( ) 歳
- 4) 性 別
  1. 男      2. 女
- 5) 中学・高校における運動部経験
  1. あり      2. なし

## 1. 運動部の存在についてお尋ねします。

Q 1 : 運動部は大学にとって必要な存在であると思いますか。

「はい」の方は1を, 「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい⇒Q 2へ

2. いいえ⇒Q 3へ

Q 2 : Q 1で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

必要である理由として, 下記の項目群から3項目以内選択し, 重要度の高いと思われる順に該当する番号を下欄に記入して下さい。

1位	2位	3位

1 : 大学の知名度を高めることに役立っている。

2 : 受験者の獲得に役立っている。

3 : 大学構成員(教職員・学生)の連帯感の醸成に役立っている。

4 : 大学構成員の士気高揚に役立っている。

5 : 学員(卒業生)の連帯感の醸成に役立っている。

6 : 大学生の健全な心身の育成を保证する“場”である。

7 : 日本のスポーツ界の発展に貢献している。

8 : その他 ( )。

⇒Q 4へ

Q 3 : Q 1で「いいえ」と回答された方のみお答え下さい。

必要でない理由を, 度合の高いものからお書き下さい。

1位:

2位:

3位:

## 2. 貴方自身と中央大学運動部との関わり合いについてお尋ねします。

Q 4 : 貴方は普段運動部の活動や競技成績を気にしていますか。

「はい」の方は1を, 「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい⇒Q 5へ

2. いいえ⇒Q 6へ

Q 5 : Q 4で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

どの程度注目しているかを下記の項目群の中から選んで回答して下さい。該当するものはすべて番号を下欄に記入して下さい。




Q10：Q 8で「いいえ」と回答した方のみお答え下さい。

機会があれば、運動部の学生と親しくつきあいたいと思いますか。「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. は い
2. いいえ

3. 運動部の活動と学業との関係についてお尋ねします。

Q11：運動部の活動と学業は両立させるべきだと思いますか。

「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. は い⇒Q12へ
2. いいえ⇒Q15へ

Q12：Q11で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

貴方やクラスの友人達は、運動部学生の学業に対して協力をすることがありますか。「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. は い
2. いいえ

Q13：Q11で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

現在両立できている学生は多いと思いますか。「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. は い⇒Q16へ
2. いいえ⇒Q14へ

Q14：Q13で「いいえ」と回答された方のみお答え下さい。

両立できていない理由を、下記項目群から3項目以内選択し、重要度の高いと思われる順に該当する番号を下欄に記入して下さい。また、具体的な改善策があればお聞かせ下さい。

1位	2位	3位

- 1：学生がそもそも両立の必要性を感じていない。
- 2：学生自身の努力が欠如している。
- 3：大学入学時の学力に問題がある。
- 4：練習や試合などのため授業に出席できない。
- 5：練習以外の拘束時間が多い。
- 6：両立に対する運動部の指導に問題がある。
- 7：大学側に両立できる体制や制度が整っていない。
- 8：寮や合宿所での学習環境が整っていない。
- 9：その他 ( )。

⇒Q16へ

改善策

Q15：Q11で「いいえ」と回答した方のみお答え下さい。  
両立させる必要がない理由をお聞かせ下さい。

4. 大学における運動部の活動状況と、あり方についてお尋ねします。

Q16：現在スポーツ推薦の特別枠で入学する学生は，1，2部合計で約200名です。

貴方はこの入学制度の存在を知っていましたか？「はい」の方は1を，「いいえ」の方は2を○  
で囲んで下さい。

1. は い
2. いいえ

Q17：貴方はこのスポーツ推薦入学制度は必要な制度であると思いますか。

「はい」の方は1を，「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. は い
2. いいえ

Q18：中央大学には現在スポーツ奨学金制度がありませんが，この制度を設ける必要があると思いますか。

（スポーツ奨学金制度：競技成績，学業成績，家庭の経済状態等の状況に応じてランクを付け，大学の入学金・学費・寮費などの一部，または全額を免除する制度）

「はい」の方は1を，「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. は い
2. いいえ

Q19：Q17・18で「いいえ」と回答した方のみお答え下さい。

スポーツ推薦入学制度や奨学金制度が必要ない理由をお聞かせ下さい。

Q20：中央大学の運動部をもっと強化すべきだと思いますか。

「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい⇒Q21へ

2. いいえ⇒Q22へ

Q21：Q20で「はい」と回答した方のみお答え下さい。選手の入学制度以外の点で、

部活動に対する大学の広報・支援活動として、何が不足していると考えますか？下記の項目群から3項目以内選択し、重要度の高いと思われる順に該当する番号を下欄に記入して下さい。

1位	2位	3位

1：練習環境の整備。

2：寮や合宿所などの生活環境の整備。

3：指導体制の充実。

4：教職員、学生の協力体制。

5：試合日程等の広報活動。

6：試合チケット等の販売。

7：応援ツアー等の企画。

8：その他（ ）。

⇒Q23へ

Q22：Q20で「いいえ」と回答した方のみお答え下さい。

強化が必要でないと考え理由をお聞かせ下さい。

Q23：中央大学にあって運動部はいかにあるべきか。

貴方の考える理想的な運動部像を、なるべく具体的にお聞かせ下さい。

長い間、ご協力ありがとうございました。

参考資料 6	教職員向アンケート
--------	-----------

## 大学運動部に関するアンケート調査のお願い

大学運動部は長年にわたって日本のスポーツ界の中心的役割を担ってきましたが、昨今は多くの競技種目で主役の座を追われているのが現状です。

18歳人口の激減が見込まれる昨今、大学改革をめぐる議論は活発ですが、大学運動部を取り巻く社会的環境も大きく変わりつつあります。新しいプロスポーツの誕生、ニューススポーツやアウトドアスポーツの流行、スポーツコマースリズムに伴う競技レベルの高度・専門化など、スポーツの可能性が多種・多様化するなかで、学生達の意識も変容を余儀なくされていると思われます。

そこで、今般私達は現在の大学運動部が置かれている状況を把握し、その位置付けと今後の展開の方向性を探るべく、運動部学生を含む在校生と教職員の方々を対象に、アンケート調査を実施することと致しました。

ご多忙中お手数とは存じますが、上記の趣旨をご理解頂きました上で、貴方の「大学運動部」、「運動部選手」に関するお考えをお聞かせ頂きたく、ご協力の程をお願い申し上げます。

なおアンケート結果は、調査・研究以外の目的に使用することは一切ございません。

1997年7月1日

中央大学 保健体育研究所

企業スポーツ研究班

主査 成瀬 璋

## アンケートの回収方法について

—7月末日迄に、各学部下記の担当者のメイン・ボックスに投函願います—

法学部	西谷 明子	文学部	加納 樹里
経済学部	青木 清隆	理工学部	高橋 雄介
商学部	成瀬 彰	総合政策学部	深瀬 吉邦

\*\*\*\*\*

《記入・該当する番号に○をつけて下さい》

- 1) 職 種
  1. 教員    2. 職員
- 2) 中央大学における在職年数
 

[    ] 年
- 3) 年 齢
 

[    ] 歳
- 4) 性 別
  1. 男    2. 女

## 1. 運動部の存在についてお尋ねします。

Q 1 : 運動部は大学にとって必要な存在であると思いますか。

「はい」の方は1を, 「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. は い⇒Q 2へ

1. いいえ⇒Q 3へ

Q 2 : Q 1で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

必要である理由として, 下記の項目群から3項目以内選択し, 重要度の高いと思われる順に該当する番号を下欄に記入して下さい。

1位	2位	3位

1 : 大学の知名度を高めることに役立っている。

2 : 受験者の獲得に役立っている。

3 : 大学構成員(教職員・学生)の連帯感の醸成に役立っている。

4 : 大学構成員の士気高揚に役立っている。

5 : 学員(卒業生)の連帯感の醸成に役立っている。

6 : 大学生の健全な心身の育成を保障する“場”である。

7 : 日本のスポーツ界の発展に貢献している。

8 : その他 ( )。

⇒Q 4へ

Q 3 : Q 1で「いいえ」と回答された方のみお答え下さい。

必要でない理由を, 度合の高いものからお書き下さい。

1位:
2位:
3位:

## 2. 貴方自身と中央大学運動部との関わり合いについてお尋ねします。

Q 4 : 貴方は普段運動部の活動や競技成績を気にしていますか。

「はい」の方は1を, 「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. は い⇒Q 5へ

2. いいえ⇒Q 6へ

Q 5 : Q 4で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

どの程度注目しているかを下記の項目群の中から選んで回答して下さい。該当するものはすべて番号を下欄に記入して下さい。






Q10: Q8で「いいえ」と回答した方のみお答え下さい。

機会があれば個人的なつきあいをしたいと思いませんか。「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい
2. いいえ

3. 運動部の活動と学業との関係についてお尋ねします。

Q11: 運動部の活動と学業は両立させるべきだと思いますか。

「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい⇒Q12へ
2. いいえ⇒Q15へ

Q12: Q11で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

貴方は運動部学生の学業に対して特別な協力や配慮をしていますか。

「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい
2. いいえ

Q13: Q11で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

現在両立できている学生は多いと思いませんか。「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい⇒Q16へ
2. いいえ⇒Q14へ

Q14: Q13で「いいえ」と回答された方のみお答え下さい。

両立できていない理由を、下記項目群から3項目以内選択し、重要度の高いと思われる順に該当する番号を下欄に記入して下さい。また、具体的な改善策があればお聞かせ下さい。

1位	2位	3位

1: 学生がそもそも両立の必要性を感じていない。

2: 学生自身の努力が欠如している。

3: 大学入学時の学力に問題がある。

4: 練習や試合などのために授業に出席できない。

5: 練習以外の拘束時間が多い。

6: 両立に対する運動部の指導に問題がある。

7: 大学側に両立できる体制や制度が整っていない。

8: 寮や宿所での学習環境が整っていない。

9: その他 ( )。



- 
- 1：十分な練習時間.
  - 2：練習施設の充実.
  - 3：練習器具・用具の充足.
  - 4：監督・コーチの指導力.
  - 5：専任トレーナーによる身体管理力.
  - 6：学内の万全な医療体制.
  - 7：OB 会の後援力.
  - 8：教職員の協力体制.
  - 9：運動部に所属しない学生の協力体制.
  - 10：寮や合宿所での良好な生活環境.
  - 11：その他 ( ).
- 

Q18：スポーツ推薦入学制度は必要な制度であると思いますか。

「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい⇒Q19へ

2. いいえ⇒Q20へ

Q19：Q18で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

現行の推薦入学制度を改善するとすれば、どのようなことを希望しますか。下記項目群から上位3項目以内を選び、該当する番号を下欄に記入して下さい。

1位	2位	3位

- 
- 1：全体の推薦枠を増加させる。
  - 2：男子学生の推薦枠を増加させる。
  - 3：女子学生の推薦枠を増加させる。
  - 4：各運動部の競技成績や学業成績に応じて推薦枠を見直す。
  - 5：競技種目に応じて推薦枠を見直す。
  - 6：競技上の推薦基準を緩やかにする。
  - 7：学業上の推薦基準を緩やかにする。
  - 8：全体の推薦枠を減少させる。
  - 9：競技上の推薦基準を高くする。
  - 10：学業上の推薦基準を高くする。
  - 11：現行のままでよい。
  - 12：その他 ( ).
-

Q20：Q18で「いいえ」と回答した方のみお答え下さい。  
推薦入学制度が必要ない理由をお聞かせ下さい。

--

Q21：中央大学には現行スポーツ奨学金制度がありませんが、この制度を設ける必要があると思いますか。「はい」の方は1を、「いいえ」の方は2を○で囲んで下さい。

1. はい⇒Q22へ

2. いいえ⇒Q23へ

Q22：Q21で「はい」と回答された方のみお答え下さい。

奨学金制度を導入する場合、下記項目群の中で最も適切と思われるものを1つだけ選んで該当番号を下欄に記入して下さい。

1位

1：競技実績に基づいてランキングを定め、それにしたがって下記の5段階に分ける。  
2：学業成績を勘案してランキングを定め、それにしたがって下記の5段階に分ける。  
3：家庭の経済状況を勘案してランキングを定め、それにしたがって下記の5段階に分ける。

4：競技実績・学業成績・経済状況を勘案してランキングを定め、それにしたがって下記の5段階に分ける。

5：5段階の内訳：

- 入学金免除
- 学費免除
- 寮費免除
- 入学金・学費免除
- 入学金・学費・寮費免除

Q23：Q21で「いいえ」と回答した方のみお答え下さい。  
奨学金制度が必要ない理由をお聞かせ下さい。

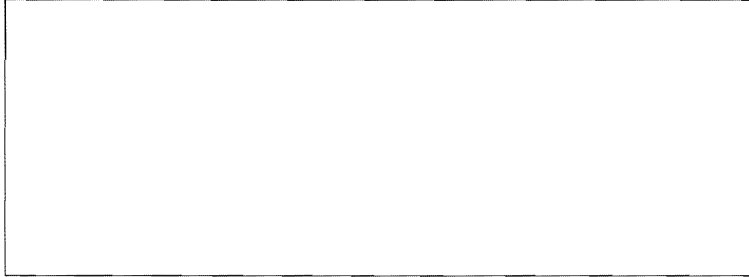
--



5. 大学における運動部のあり方についてお尋ねします。

Q27：中央大学にあって運動部はいかにあるべきか。

貴方の考える理想的な運動部像を、なるべく具体的にお聞かせ下さい。



長い間、ご協力ありがとうございました。